

特500

211



* 0034989000 *

2

0034989-000

特500-211

マルクスは叫ぶ

矢橋三子雄・著

大衆出版社

昭和6. 2

AGC

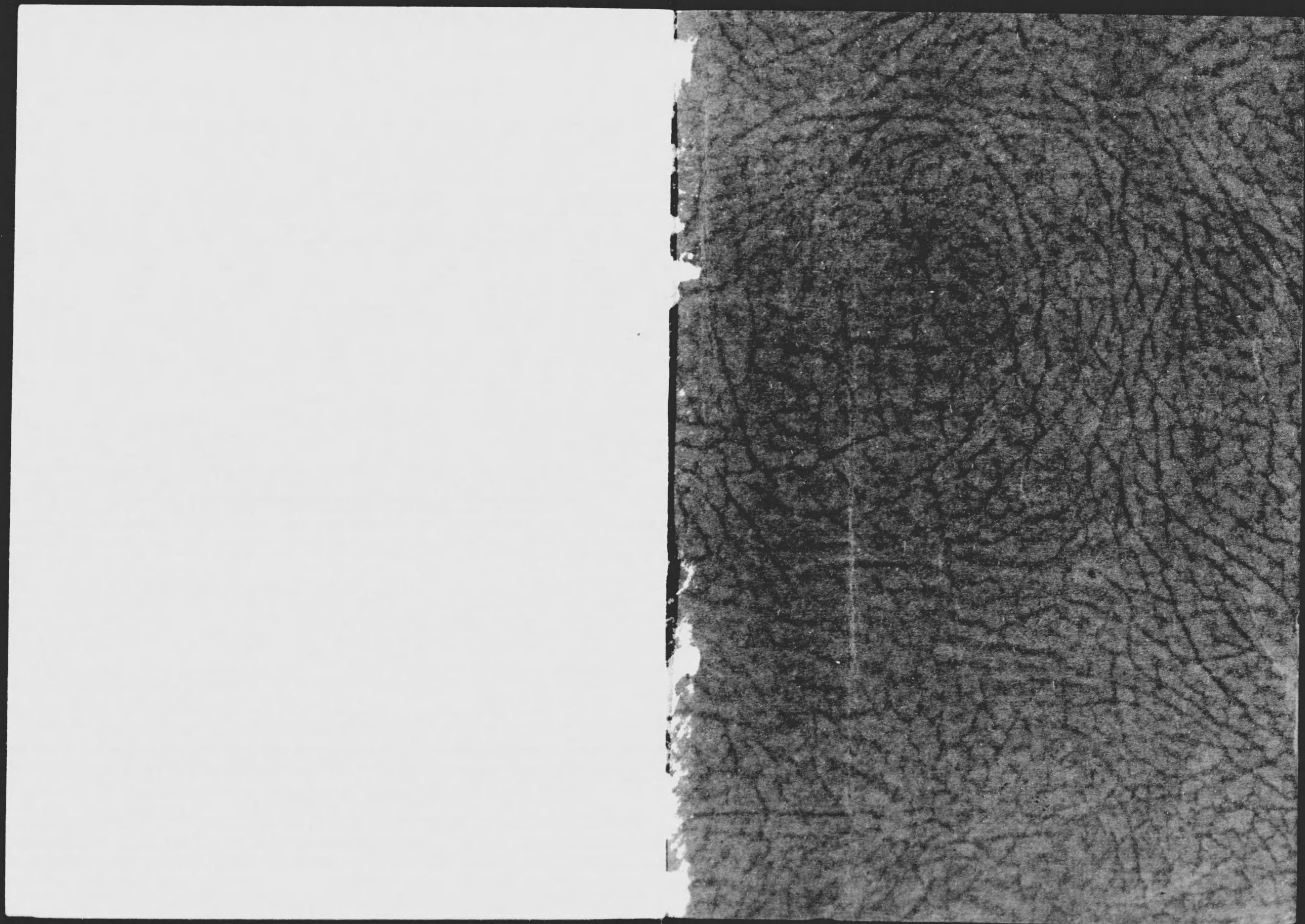
この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

特500

211

盟聯ヤリタレロフ
善雄子三橋矢

足
夕
久
人
は
叫
ぶ



号外

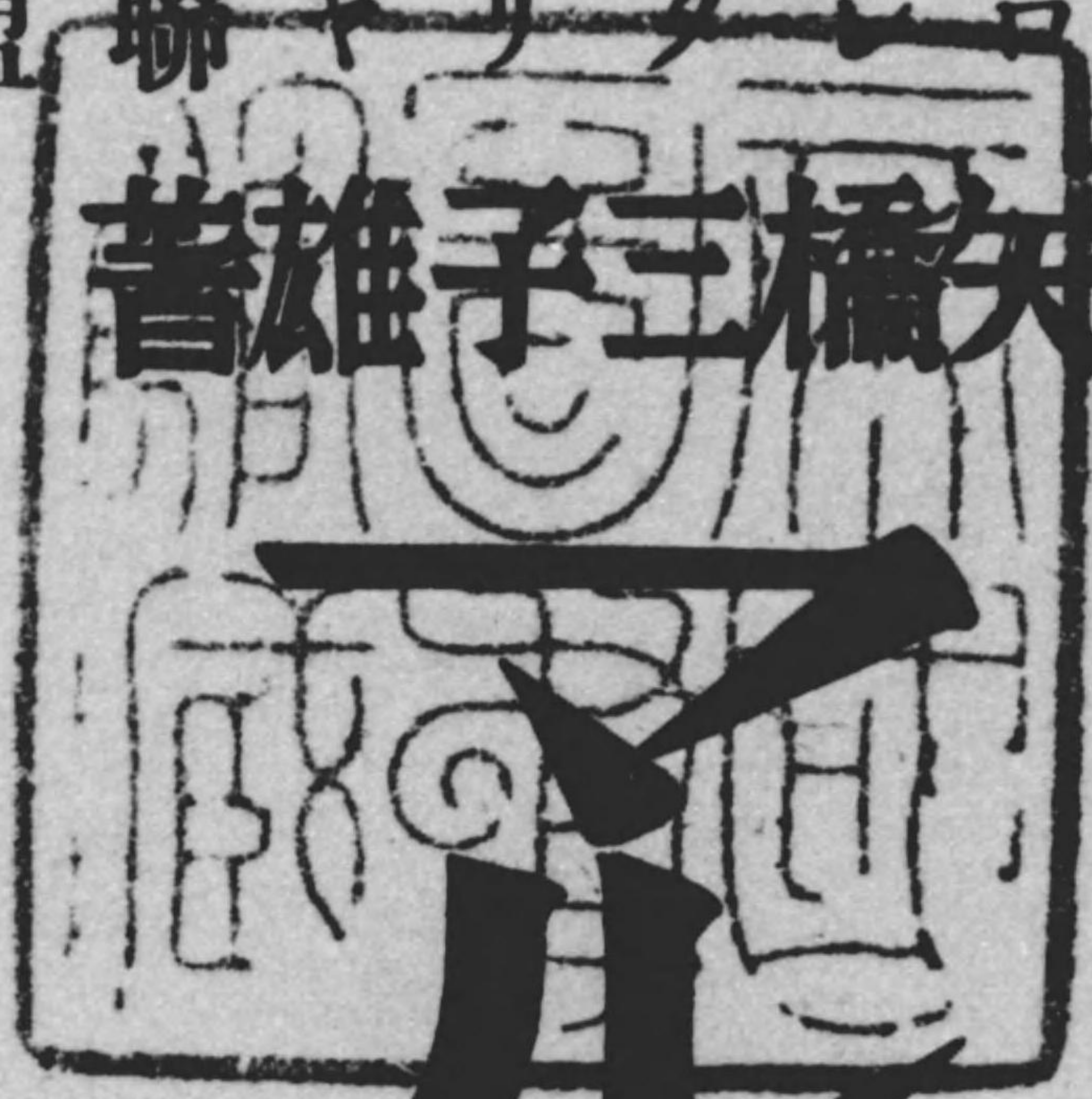
内務省
 昭 7.1.-7 上
 和 第 83 號

函	安
	480
號	436
永久保存	

禁安 1-319
特 500-211

盟 聯 ヤ リ タ ヲ ロ プ

善雄子三橋矢



ル
ク
ス
は
叫



序に代へて

マルクスの學說を説いた著述は、我國に於ても、非常に多く十指に盡きぬ位ある。凡ゆる學者に依つて、或ひは解説し、批判されてゐる。中には反マルクスなる旗色の下に、マルクスの說に反對した論鋒をなす學者もあり、マルクスの學說は、我國に於ても餘りに人口に膾炙してゐるのである。

元來マルクスの學說なる原本は非常に老なるもので、我國の譯本としても祇に五六千頁に達するといふ大著述であり、且つ我國に於ける諸學者の解説にしても、批判にしても、餘りに學說的、論理的に傾き一般大衆の讀物としては聊か難解の點なきにしもあらずで、從つて眞にマルクスの云はんとする處、聲を大にして叫ばんとした點を知る事は、甚だ容明ではない。語を換へて云へば、從來の著述は、眞にマルクスを知り、彼の學說を眞に知らんとするには、聊か大衆的でなかつたと云ひ得る。

時代は是れ將に、準備時代より鬭争時代に入らんとする。我等全プロレタリアートの雄々しくも、一九三一年度を期して、××に向つて進出せんとするの秋、我等同志として眞にマルクスを解せず、マルクスを知らずして、同志を語り、××を叫ぶ資格なしといふ可きであらう。

我親愛なる同志よ！先づ眞にマルクスを知れ、マルクスは眞に何を叫んだかを知得せよ。従來各方面の同志より此の事を慇懃せられる事切なり、此處に於て吾等何人にも一讀して、眞にマルクスを知り、彼の叫ばんとしたる所を知得するに足るものと心掛けてゐた折柄、大衆出版社の好意と意氣に依り、今これを公にする事を得た。

元より此の小冊子前述の如く老犬の著述全般を輯録することは到底困難なるも、眞にマルクスの云はんとし、叫ばんとした。所謂マルクス學說のエツキスとも云ふ可き點は、十二分收めたと信ずる。故に本書は眞にマルクス學說をエツセンスしたる。尤も大衆的のものとして、これ程平易に且つ實直にその根本を傳へたるものは他にないと聊か自負する次第である。親愛なる同志よ！正午の三十分の休息の時間にも、午後三時の十五分間の休憩時間にも切に本書を繙きて眞にマルクスの叫びを聞いてくれ！以て彼の眞の叫びを知得して貰へば本小冊子の面目之に過ぎるものあらん。

一九三一年一月

下落合の茅屋にて

著者識す

マルクスは斯く叫ぶ

目次

一、虐げられし學者達……………	一
二、武器としての進化論……………	四
三、戦渦中に投り込まれた進化論……………	九
四、キルヒヨーとヘツケルの論争……………	三
五、明治維新と進化論の足迹……………	一七
六、進化論とダーキン、マルクス……………	二一
七、人口の繁殖率と食物の生産率……………	二四
八、プロレタリアを護る學問……………	二九
九、精神と物質(一)……………	三五

目次

一〇、精神と物質(二)……………四〇

一一、歴史の頁を繰る手……………四三

一二、進化の第一要件……………四八

一三、生産と社会機構の變遷……………五三

一四、社会革命の因子……………五九

一五、意識以外の眞實……………六四

一六、歴史前紀の終結する時……………六七

一七、歴史の流れに抗するもの……………七三

一八、相闘ふ二つの階級……………七六

一九、生産力と社会制度……………八四

二〇、社会主義の必然性……………八八

二一、プロレタリアートの勝利……………九三

二二、スミスとリカードの労働價值説(一)……………九八

二三、スミスとリカードの労働價值説(二)……………一〇三

二四、貨幣なき交換制度……………一〇九

二五、マルクスに於ける價值の準標……………一四

二六、「社会的必要労働」の價值……………二二

二七、利潤及びその源泉……………二六

二八、利潤の謎を解く鍵……………三二

二九、労働力即ち人間の生命……………三六

三〇、餘剩價值の正體……………四一

三一、餘剩價值と利潤の關係……………四六

三二、労働と資本の闘ひ……………五一

三三、成長する資本……………五八

三四、賃銀労働とは如何なるものか……………六四

三五、資本の増大とその影響……………六八

目次

三六、労働賃銀と利潤の関係……………一七三

三七、利害相反する二つのもの……………一七六

三八、進化の尖端に相喰む資本……………一八三

三九、資本集中の犠牲……………一八八

附録

四〇、ブルジョアジーのための墓掘人(マルクス、エンゲルス)……………一九四

四一、プロレタリアートの階級への組織(マルクス)……………二〇四

目次終

マルクスは斯く叫ぶ

ゴルキユーー原著

矢橋三子雄譯

一 虐げられし學者達

「體學問といふものは真理を研究する筈のものであることは、諸君も既に御存じのことであらう。學問が真理を研究するものであるならば、無論いふことであるに違ひない。ところがそのよいことであるべき筈の學問が、即ち真理の研究が、吾々の歴史を調べて見るとどうもその時々、時代權力としばしば衝突してゐることのあるのを發見する。」

例へば、昔し太陽が地球の周圍を廻つてゐるのだと一般に考へられた時代に、「いやさうではない、實は地球それ自身が太陽の周圍を廻つてゐるのだ。」といふ學説を立て、そのために處刑され

虐げられし學者達

た學者さへあるのだ。その時代のことを今から考へてみると、實に學問といふものが如何にその時代々々の輿論、乃至はその權力を握つてゐるものゝために左右されたかと分る。かくの如く學問は時として權力のために、壓迫され中斷されることがあるのである。又、時としては迫害も何も蒙らずに、全然無視され捨て去られてそのまゝ葬られてしまふこともあるのである。かのニュートンが引力説を考へ出した當時には、ほんの二三の専門家の間に注意を惹いただけで、一般社會人には殆んど知られもせず問題にもされなかつたのである。が、それから五十年ばかり経つて初めて、即ちフランス革命のほんの少し前にヴォルテールといふ人が、ニュートンの引力説の通俗本を出版したことによつて、初めて一般社會に地球の引力説といふものが普及され研究され出したのである。

さて、ニュートンの引力説は何故五十年の間一般社會乃至學者達からさへ無視されてゐたのであらうか？又その無視されてゐた學説が、何故五十年も過ぎてからの後に初めて問題視され研究されだしたのであらうか？ヴォルテールが引力説に關する通俗本を書いたからではあらうが、然し何故彼が書いたやうな通俗本が五十年前には書かれなかつたのであるか。それは外でもない。

ヴォルテールといふ人がその通俗本を書いた時代が、時恰も引力説が一般社會に大いに歓迎せらるべき時代であつたからである。フランス革命の爆發期が急迫して來て、社會の人心がさうした新しい方向に向つて動いてゐたからである。即ち、その當時の商工階級が封建的な貴族僧侶に反抗する必要上、新しい學問（新しい理論、新しい考へ方）が一般社會人の役に立ち出したのだ。換言すれば、ブルジョアジーが封建貴族に對して戦ふその戦争の武器として、新しいものゝ見方や考へ方が必要になり役立つて來たのである。つまりニュートンの引力説が五十年後のフランス革命前になつて初めて一般社會に普及したといふことは、さうした從來の傳統を破りくつがへすやうな新學問が、社會大衆の大歓迎を受けるといふ時代になつて來たことに外ならないのである。だから學問といふものは、その時代々々の事情と輿論、乃至は權力に依つて或は壓迫され或は無視され、或は歓迎されたり左右されたりするのである。畢竟或る新しい理論や學説が勢力を獲得し社會から歓迎されるといふことは、その新しい學問が階級闘争の武器として役立ち應用される時なのである。元來學問といふものは眞理の研究であるには相違ないが、しかし如何に一般社會大衆の利害とはかけ離れたやうな學問でも、必らずその時その時代の社會關係といろ／＼密接

不離な因縁を有してゐるものなのである。

二 武器としての進化論

さて、諸君も既に幾分御承知であらうところの進化論といふ學問が、十九世紀時代に初めて一般社會に行はれた時にも、それにはいろ／＼と面白い變遷があつたのである。進化論はいふまでもなく一切の動植物、一切の生物が、造化の神が地球を造つた時に拵らへておいたのがそのまま今日まで存続してゐるといふやうな、從來のキリスト教の思想に反對してさういふすべての生物の種類といふものは、地球が出来上つたその當時から存在したものではなく、初めは極く簡単な生物がだん／＼と今日のやうな複雑極まる生物に變化進展して來たものであるといふことを説いたものである。そして進化論といへば、誰でもすぐに「人間の先祖は猿である。」といふことを考へるほどである。

ところで、この吾々人間の先祖は猿であるといふこと、これはどうもその當時のキリスト教の利益のためには一大事であつたのだ。彼等が「人間は神様がお造りになつたものだ、」と教へ込ん

でゐるところへ、人間は神様が作つたのぢやなくて猿から進化して來たものであるといひ出され
ては、全くのところ人間の相場が下落し神様の體面がなくなつてしまふ。神様の體面を損ずるだ
けならばまだしもだが、彼等キリスト教徒にとつてはまだ／＼外に重大なことがあつた。——そ
の當時、政治上の權力を掌握してゐる貴族とか××とか僧侶とかいふ所謂權力者階級から見ると
その自分達が持つてゐる權力の背景（こゝが肝腎だ）としてゐるところの神様に、ケチを付けられ
ては甚だ困るのであつた。「人間は神様の子だ。その人間の中の貴族や××や僧侶はつまり神様
の代理である。だから俺達の命令し求めるところは神様自身の命令であり求めるところだと思つ
て服従しなければならぬ。」といつたやうな具合に多くの一般社會大衆を支配し服従させてゐる
ところへ、「いや人間は神様が造つたのでも鬼が造つたのでもない、猿から進化して來たもので
謂はゞ猿の子に過ぎないのだ、といふやうな新學説が出現して來たのでは、結局一般民衆が彼等
權力者階級、つまり神様のいふことをきかなくなる。服従しなくなる。

そこで右のやうな封建的權力を握つてゐる貴族僧侶階級の人達は、何とかして人間が猿の子だ
といふやうな新説を壓服し覆へしてしまをうと考へだすのである。ニュートンの引力説が五十年

間も葬られてゐたといふことも、結局かうした理由からに外ならないのだ。所が、その貴族僧侶階級に反対する新興ブルジョアジー、即ち商工階級はかういふ新しい學説を知つて来て「成程これは彼等貴族権力者階級に反抗する武器として非常に効果的である。何故なら、彼等の最も大切にしてゐる肝腎の神といふものを否定する學問であるからだ。」と考へつくのは理の當然であつた。従つて新興ブルジョアジーは大いに進化論を歓迎し普及しようとなつた。又一方貴族僧侶達の方では大いにその進化論を壓服し放逐しようとしてその人々を壓迫したのであつた。即ち、學問といふものは専ら眞理を研究することではあるけれども、實際はある階級のためには利益になり、ある階級のためには害となる。従つて利害の一致しないそれ／＼の階級によつて或は排斥され、或は歓迎されることになるのである。

既に御承知の如く進化論なるものは英國のダーキンといふ人が先づ発見したのであつたが、をかしたなことにはその本國たるイギリスに於いては進化論は餘り歓迎もされず普及されもしなかつたのである。その原因を考へてみると、英國ではブルジョアジーの發達が早く、ダーキンが進化論を唱道した當時にはもう彼等ブルジョアジーはかなりの勢力を得てゐたのであつた。即ちさ

う大して貴族僧侶階級と戦ふ必要がなかつたのである。進化論を武器として利用する必要がなかつたのである。以上のやうな理由からして、英國ではその進化論が大した歓迎を受けなかつたのである。ところが今度はドイツへ行つてみると、ダーキンの進化論がそれこそまるで燎原の火の如くといつた勢ひで、ドイツ全土に亘つて盛んに歓迎され鼓吹され、そしてそれが又盛んに受け容れられたのである。といふのは、とりも直さずドイツといふ國の發達が、——社會一般の進歩が英國より遅れてゐて、丁度そのころがブルジョアジーの勃興期であつたことを立證してゐるのである。即ち、未だ封建的勢力が中々根強く頑張つてゐたので、それを商工階級が何とかしてブツ倒したいと考へてゐるところへ、時恰も進化論といふ彼等のためには利益になる新學説が唱道されだしたので、早速階級闘争の武器として彼等商工階級が利用したのである。

ダーキンは純粹な生物學者として動物や植物のことを研究した結果、進化論といふ一大新學説を発見したのであつた。ところがその進化論をドイツに普及させたヘツケルといふ學者は、非常に有名な生物學者であるには相違ないが、しかし彼は單なる學者ではなかつたのである。彼は實にドイツに於けるブルジョアジーの代辯者であつたのである。彼ヘツケルはもとより商工業に直

接の利害關係を有つてゐる人間ではなかつたけれど、その商工業階級の知識的な代表者であつたのだ。彼は生物學者ではあるけれどもその一方においては、政治的な意義を有つてゐるブルジョアジエの學者でもあつたのだ。ところがこゝに困つたことには、前述の如く盛んにドイツで進化論が行はれ初めた時に、そろ／＼擡頭しかゝつてゐた社會主義者の方でも大いにその進化論を利用し出したことであつた。折角ブルジョアジエが進化論を武器として封建的權力を打ち倒さうと懸命に戦つてゐるところへ、下から起つて來た社會主義者や無産勞働者階級が同じやうにその進化論を武器としてブルジョアジエとの階級闘争に利用し出したのであつた。そしてかうした傾向はダーキンの進化論ばかりではなく、一般の學問界を通じて右のやうな傾向が動いてゐたのである。前述した如く、ブルジョアジエは宗教攻撃を懸命にやつた。宗教を攻撃することは即ち封建貴族階級を攻撃する結果になるからである。そして彼等貴族階級に反してブルジョアジエ達は物質主義を以つて起つた。けれども、彼等ブルジョアジエが未だ封建貴族階級を充分征服し切らぬ中に、もう下の方から無産勞働者階級が彼等に對して戦闘を開始して來たのであつた。即ち上には封建的權力があり、下には新しい××的勢力が起つて來て彼等ブルジョアジエは全く

の板挟となつたのである。彼等は自分の上にあるものに向つては物質主義を以て古い制度權力を打ち倒したいのだけれども、しかし一方今度は下の方から起つてゐる勞働階級から同じ方法、同じ劍を以つて突かれなければならないといふ境遇に立到つたのである。

三 戦渦中に投り込まれた進化論

こゝに於いて、一般學界の氣分が變遷して來て、結局學問といふものはその時代に勢力を有してゐる階級の代表思想であることになつた。尤も、同じ時代にそれ／＼の階級を思想で代表するもの——即ち封建的思想を代表するもの、ブルジョアジエ思想を代表するもの、勞働階級の××的思想を代表するもの等々——がある。けれども最も勢力のある階級の代表思想がその當時に於ける一般的な學問となつて現はれるのである。従つてブルジョアジエが社會的な勢力を獲得して來れば、その時代の學問といふものは即ちブルジョアジエの利益を代表するものとなるのだ。故にブルジョアジエが社會の中心權力を握り、それに反抗する階級を壓服といふやうな位置に立つた時には、そのブルジョアジエを代表する學問なるものはもう既に革命的な純物質主義ではなくな

るのである。

そこで十九世紀の中葉以後は、一般の學界に精神主義の傾向が再び復活して来てそれが今日まで存続してゐるのである。そして彼等ブルジョアジーは物質主義に反對していふのだ。「どうもさういふ風に物質一點張りではいけない。精神的な要素をも考慮こうりょの中に入れねばならぬ。科學萬能といふことは人間の生活を機械化してしまつて面白くない。何といつても一般社會には精神的要素が非常に重大なものであるから、それを度外視しては本當の眞理まことに到達することは出来ないのである。」と。だがこれは結局學問の後退であり又ブルジョアジーの退化に外ならないのだ。ブルジョアジーの退化といふことは、上に對しては反抗、下に對しては鎮壓ちんあつといふ中途半端な矛盾した態度になつて来たといふことを意味するにすぎないのである。

如上の通り進化論は非常な勢ひで流布りゅうぷされ發達した。そしてその後にもいろいろと修正補足が行はれた。勿論學問上のダーキン一人の研究がすべての方面に行届くといふことは不可能事であるから、その後も澤山の學者がいろいろと部門を分けて進化論の完成に努めたのであつた。けれどもそれを或る一方から觀察してみる時、一般學界に於ける後退の傾向がやはりこの進化論の上

にも現はれて来たのである。——吾々人間は猿の子孫で、生存競争のための自然淘汰しぜんたうたによつて段々に發達して来たものであるといはれてゐるけれど、しかし自然淘汰といふことはその根本に於いて疑問がある。生物の進化は自然淘汰一點張りでは説明がし盡されないぢやないか——といふやうな種々の新説を出現して来たのである。要するにこれ等もやはり精神的、心理的な要素を必要とするといふ一般學界の時代的傾向が現はれて来たものに外ならないのだ。

又進化論は、次のやうな意味からも彼等ブルジョアジーのために利用されて来た。即ち進化論に依れば生物が今日の如く變遷して来たのは中々一朝一夕のことではない。數千年數萬年の間に眼に見えないやうな徐々じょじょ緩々とした進化を経てこゝまで到達して来たものである。だからこの世の中の組織そしや制度にしてもさう人爲的に急激な變化の起せるものではない。以上の理論は、彼等ブルジョアジーを非常に喜ばし利益した。ところが又ドブリースと云ふ人の説によると、進化といふことは必ずしもさうした徐々緩々たる變化ばかりではない、時としては思ひもよらぬ急激な變化を起すこともある。現にある種の草花そうくわの如きは、ある時期に至ると忽然こつぜんとして色か變り形が變つて全然新しい種類のものが生ずると、發表したのであつた。これはブルジョア進化論の徐々

級々説に對して突變説、若しくは激變説とも稱されてゐるものである。この突變説を發見したドブリースは政治とか社會とかいふことには全く關係なく、純粹の生物學上の研究として發表したのであつたが、一般社會のためにもその新説が認められ歓迎されたのであつた。その所以は次第に労働運動なり××運動なりが勢力を擴充して來て、ブルジョア進化論の徐々緩々説に對して人間社會にかなり急激な變化が起り得べきこと、又起らねばならぬといふ思想乃至社會現象が認められ發現してゐた時代であつたからである。

かうした結果、ダーキンは偉い、進化論は學問の根本だといはれてゐたのが、それは一時のこととで今度は又進化論はまだ一つの謎である。といふやうなことが随分社會へ喧傳されるに至つたのであつた。(それは勿論進化論が労働階級に依つて戦闘の武器として利用せられた以後のことではあるが)ブルジョアジーとしては、自分のためにもう進化論といふ武器が必要でなくなつて來たので、何とかして進化論にケチをつけようとしたのである。(丁度彼等が封建貴族階級の守り本尊であつた神にケチをつけようとしたと同じやうに)——進化論の破綻とか崩壊とか云ふことが頻りに論じられるのは即ち以上の如き理由からなのである。最近擡頭し普及されて來た

マルクス主義に對しても亦同様であつて、ブルジョアジー共の味方をする御用學者達からは盛んにマルクス主義の破綻とか、誤謬とかいふことが際限もなく喧傳され提唱されてゐるのを吾々は見る。

だからどうも學問といふものは困つた品物で、眞理の研究がその目的である筈の學問をするために學校へ行つて、先生の講義を聞いたりその著書を読んだりしても實はそれがちつとも當にならないことなのである。何が眞理であり、どれが本當のことであるか一向分らないのだ。そしてダーキンは單に自分の専門としてゐる生物學に關する研究を發表したのであるに過ぎないが、一般社會からはそれがいろ／＼な意味からいろ／＼な階級の利益のために利用されてしまつてゐるのだ。よく考へてみると吾々は全く迂濶に本も讀めなければ思想學説をも發表出來ないのである。

四 キルヒヨーとヘツケルの論争

次に述べる話は諸君の中にも既におきよになつた方もあるであらうが、ドイツで進化論が非常に盛んになつたころ實際にあつた話で、そのころドイツにキルヒヨーといふ學者があつた。この

キルヒヨーといふ人は醫者であり且つ有名な博物學者でもあつた。そのキルヒヨーが何かの學術大會といふやうなものに出席して、そこで進化論に對する非難攻撃の演説をやつたことがあつた。その演説は有名な學者にも似合はず非常に非學究的なもので、大體次のやうなものであつたのだ。——諸君の中にはこのころ流行してゐる進化論なる學説を大變有難がる人もあるらしいが、この進化論なるものゝ正體はといふとソラあのお隣のフランスでやつた大騒動、あの大騒動の中に潜んでゐるところの危険思想の根柢となつてゐるものに過ぎないのである——といふ風に彼は進化論を攻撃したのであつた。

お隣のフランスでやつた大騒動とキルヒヨーの云つたのは、一八七一年のかのバリ・コンミュンのことをいつてゐるのであつて、それはバリの労働者が僅か二ヶ月間ではあつたがフランス國家の政權を握つた時のことである。これについては少々ばかりその事情について述べておく必要がある。その事情といふのは普佛戰爭の結果としてナポレオン三世がドイツの俘虜となつたので、バリの労働者やX的思想家が騒起して純粹な労働者階級のための政府を作つたのであつた。それは前にも述べたやうに二ヶ月ばかりで悲惨な滅亡——といふより反動的野心家の裏切りのために

壓服されてしまつたのであつたが、とに角歴史上に於いては初めてのプロレタリア國家であつたのだから全くキルヒヨーのいふ如く大騒動には違ひなかつた。そこで彼は進化論といふ奇體な新學説はバリ・コンミュンの大騒動の裏に潜んでゐる社會主義思想の根柢となるものであるのだから、従つてこの進化論に賛成し味方するものゝ氣が知れないといつて、進化論者即社會主義者といふやうな非學究的な論法で進化論の攻撃を行つたのであつた。

元來進化論なるものは單に生物學上の研究を發表したものであるのに過ぎないのに、それを攻撃するため生物學の領域を超えて政治問題にまで踏み入り、隣國の革命運動を持出すといふことは何人が考へても随分出鱗目な方法である。ところが又馬鹿氣たことにはそのキルヒヨーの攻撃が非常に効果をもたらして、前にも記した進化論の代表者たるヘツケルの思想と理論が甚だ不利な立場におかれた。進化論なるものは學術的に斯く斯くの點が誤謬であるといふのならば、ヘツケルも亦それに對しては學術的な反駁を試みることも出来るのであるが、何しろ隣國の革命運動に結びつけて進化論を非難されるのだから全く論外である。而もその外的攻撃宣傳が非常に効果を收めたのであるから追がのヘツケルも困惑した。しかし、この場合ヘツケルは何として

も進化論を社会主義の中から救ひ出さなければならぬ。そこでヘツケルは大狼狽の中にもなか／＼巧みな辯解をしたのである。

即ち——キルヒョー氏の議論は以つての外である。進化論は決してソシアリズムと因縁連絡のあるものではなく、たゞ生物の生存競争と自然淘汰に依つていろ／＼な種類の生物が現はれたことを説いた迄のものであるとして進化論はむしろ不平等を基礎とする學問であつて、社会主義が平等自由を強調し理想とするのに比べると全く相反した二つのものであるのだ。進化論は生物各種の中に於ける個體の不平等即ち人間界でいへば上下階級の存在を認めてゐるものなのである。然るにその進化論を以つて平等の幸福、平等の自由、平等の権力を理想としてゐる社会主義と學説を同じうし関係があるなどは以つての外である。次に進化論は適者生存の學説である。即ち弱者を倒して強者が生き残り榮えるといふ學説である。ところが一方社会主義といふものは平等を主張し且つ弱者の生存を肯定し、それを助長して弱者と強者との競争を否定するところの一種の社会観人生觀乃至は經濟組織の立て直し説なのであるから、この點に於いても社会主義思想と進化論とは氷炭相容れない別箇のものたることが分る。要するに我が進化論はむしろ貴族的高踏

的な學説に外ならない。決して／＼勞働階級の味方になるやうな賤民的學理では無いのである。

と先づヘツケルの辯解した要點は以上の如くであつて、進化論はダーキンの意志とは全然意味を異にして、社会主義の味方にされたり貴族権力者階級の味方にされたりしたのであつた。然らば彼等が銘々虚説を立てゝゐるのかといふと必ずしもさうではない。皆それ／＼に相當の（或は多少の）理由と根據があつてのことなのである。要するにこれを第三者の立場に立つて約言するならば、各階級の間利害の衝突を持つてゐる社會では、學問が本當に獨立することは不可能であつて、どれもこれもが皆何かの利益のために利用されてしまふのだといふことである。

五 明治維新と進化論の足迹

さて、こゝでは上述の如き進化論の論理を日本に於ける社會的變遷の情勢に當嵌めて考へて見ることとする。吾が日本は明治維新の一大革命後、即ち徳川幕府が武家階級を倒して明治の新政府が出来上つた當時、一般社會の思想は非常に物質的な傾向を有つてゐた。佛教などいふものも殆んど無用視されて思ひ出されもしないほどであつた。かうした物質萬能主義の隆盛であつた

ところへダーキンを祖とする前記進化論が輸入されて来たので、勿論我國では大いに歓迎され喧傳された。ところがその物質萬能論は近來になつてから段々と後退の傾向を辿りつゝあるのである。即ち我國に於いても西歐に於けると同じやうに、精神主義と物質主義の鬭争（これは取りも直さず支配者と被支配者との戦争である。）が繰り返され相戦つてゐることを示してゐるものである。

明治初年のころには民権自由の説が盛んに行はれて、それが丁度今日の社會主義といつたやうな格でそのころの青年の思想を殆んど感化してゐた。ところがその思想は非常に物質的で支那の儒教も佛教も神道も、即ち一切の精神的なものがすべて輕蔑され無視されてゐた。以上の中神道といふものは歴史的な關係から幾らか尊嚴を保つことが出来たけれども、寺院だの坊さんだのといふやうなものは殆んどそのころの人々の頭からは捨て去られてゐたのであつた。しかしその後段々と年月を経るに従つて多くの青年の思想乃至感情が次第に宗教的精神的な傾向を加へて來るやうになつた。キリスト教が初めて日本に傳來して來た當時は、外國の宗教であるといふ意味から諸君も御承知の通り時の幕府から可なり苛酷な迫害を受けたのであつた。又一般社會からも殆

んど度外視されてゐた。ところが近代になるに従つてそのキリスト教が非常に我國の政府から優遇されるやうになり、それと同時に他の一切の宗教的なもの、精神的なものが復活して來た形にあるのである。畢竟するに佛教にしてもキリスト教にしても、維新當時にはすべて排斥され打ち捨てられたものが明治の中葉以後に及んで再び拾ひ上げられ歓迎されたこととなるのである。これは全く前述の歐米に於ける軌を同じうしてゐる譯であつて、精神主義の復活、宗教思想の復活に外ならないのである。そしてこの精神主義の依つて以つて起る因由の根本を解剖して見るならば、それはやはり日本も新しく擡頭しつゝあるところの無産勞働者階級の新興勢力に對する、彼等ブルジョアジー乃至×××階級の利己主義的×××が宗教の復活、精神主義の復活となつて現はれ來つたのである。

進化論はその輸入の當時から随分盛んに資本主義擁護の爲に利用され且つ利益をもたらした。何しろ人間の社會には競争といふものがなければ到底進歩は遂げられない、社會の進歩向上のためには必然的に自由競争の必要がある。そして競争のためには弱肉強食も亦已むを得ないことである。弱者の亡びるのは詰りそれだけ強者の榮える所以なのだ。それに頓着してゐるやうでは人

類社會の發達はどうしても遂げられない。といふやうな専ら強者のため、×××××支配者階級のために都合のいゝ進化説が盛んに唱へられたのである。随つて×××××などがあの大財富を僅々二三十年の間にデッチ上げた譯は、即ち適者の生存であり強者の勝利であつて、取りも直さず社會進歩の當然の現象であるとして却つて尊敬され稱讃されたのであつた。ところが近來はさうした弱肉強食主義を餘り露骨にやつては却つて彼等ブルジョアジーのために禍するといふので所謂濫情主義といふ角隠しを纏つたものとなつて來た。畢竟これもやつぱり資本主義擁護の必要上から精神主義を違つた形で復活させたものに外ならない。

あるブルジョア擁護の一學者は明かに言つてゐる。「近來の思想界は物質主義から精神主義へと段々進んでゐる。もう少しで物質主義が亡びて精神主義となる。それが本統の社會的進歩なのだ」と。これを吾々の立場から批判すれば前にもいつた如くブルジョアジーが物質主義で進みかけて行つたが、今度は却つて自分の下の方のものからそれを利用して武器とされ出したので、つまり自分の飼犬に咬みつかれたやうな大狼狽さで急に精神主義へと後戻りしたのであつた。前記の御用學者は自分自身でそれを知つてか知らないでか（恐らく意識した上でだが）物質

主義は間違ひである。精神主義で進まなければならない。吾々の行動はこれに向つて進む一切の努力であると熱心に説教してゐるのである。この學者はすべてのものをかうした立場から觀察してゐるものだから、先年來マルクス、クロボトキン等の思想が非常に隆盛しだした時、彼はこれも一時的な流行に過ぎなくて、今度はトルストイズムであらうなどいふ飛んでもない見當違ひのことを平氣で言つてゐたのである。ところがどうだらう、トルストイは中々やつては來ないがそれにも増して退却すべき筈のマルクス、クロボトキンの近來に於ける勢力と發展振りは？ それこそ全く字義通り燎原の火の如く全世界、全地球上を赤々と舐めつくしてゐるではないか。

六 進化論とダーキン、マルクス

然らば今度は社會主義と進化論とは事實どんな關係にあるかを検討してみることゝしよう——一言にしていへば進化論は生物界の進化の法則であるし、社會主義は人類社會の進化の法則であるといふことに歸着するのであるから、社會主義者が進化論を支持するのはこの進化といふことについて同じ立場にあるからに外ならないのである。そして動物にしる人類社會にしる、この地

球上に存在する森羅萬象のすべてが進化變遷して行くことは否めない事實である。従つてブルジョアジの社會が未來永劫存続するものではないといふことも亦事實であるのだ。如何なる社會も如何なる制度も絶えず進化し變遷しつゝあるのだ。かうした物の見方理論の立方に於いては、ダーキンの進化論もマルクスの社會主義も等しく同じ立場に立つてゐるのである。そして社會主義者が進化論を支持し採用するのは、この意味この點に於いて一致してゐるからである。

ダーキンの進化論はマルクスの社會學說よりも遅れて世間に發表されたので、これを歴史的にいへばマルクスの方が先であるけれども、然し學理發表の系統からいへば進化論を人類社會に適用したので、初めてそこにマルクスの社會學說が出て來たと考へることも出来るのである。ところが、ブルジョアジの進化論者達はその進化論を動物界と人類社會とに對して同じやうに適用したために、その結果として〇〇八郎や三×岩×のやうな人間を讚美するやうなことに至つた。即ち彼等は動物界でも生物界でも乃至は人類社會に在つても、進化論は一樣に適用することの出来るものであると考へてゐたのだ。そこに彼等の犯した誤謬がある。人類社會には人類社會としての別な事情のあることを彼等は意識にか無意識的にか無視してゐたのだ。

しかし吾々人間も亦生物でありそして動物の範疇に屈してゐるものである。してみると動物界の法則が人間界に適用出来ないといふことは一寸矛盾したことになる。人間も動物である以上は動物としての法則が人間に適用されない筈はない。然るに動物界のことはダーキンの進化論によつて説明されたけれども、人類社會のことがそれを以つて説明されないといふことは次のやうな譯からである。

——即ち、動物にも御承知の通りいろ／＼とその種類がある。動物の中に孤獨な生活をしてゐるものと社會的な（群居的な）生活をしてゐるものがある。動物でも蜂とか蟻とかのやうに群をなして社會的生活をしてゐるものもあれば、又虎とか獅子とかのやうに孤獨的生活をしてゐるものもあるのだ。ところでダーキンの進化論なるものは右の中主として孤獨的生活を営んでゐるところの動物に就いて説明してゐるものなのであつた。その説くところの生存競争といひ自然淘汰といひ、主として一人々で單獨な生活を営んでゐる動物に於いてのことであつた。けれど種々な動物中のその社會的生活を営んでゐるものゝ中から、人間といふ一種の二足獸、動物が進化し發達して來たのである。そこでこの人間といふものゝ社會に關する特殊の進化論——即ち四足

獸と二足獸と同じ動物でも相違し得るやうにその進化の法則に於いても相異つた法則が生成し発見されて来たのである。この新たに発見されたものが即ちマルクスの社會學說なのである。尤も、ダーキンも社會的動物について全然言及してゐるのではない。ダーキン自身もその點は、生物學者として認めてゐるし、又多少は説いてゐるのであるけれども、ダーキンの進化論を自己の利益のために利用した $\times\times\times\times\times\times\times\times\times\times$ にとつては、社會的生活を營んでゐる動物についての説明などは却つて無用の長物でしかなかつたのだ。そこで後の進化論の紹介者は、殆んど全く社會的動物のことは無視し削除して只管孤立生活をしてゐる動物が、如何に激烈な生存競争をしてゐるかといふことに重きを置いてその進化論を説き來つたのである。

これについて次のやうな話がある。

七 人口の繁殖率と食物の生産率

ダーキンが進化論を考へ付いたのはかのマルサスの人口論を讀んでからだといふことである。そのマルサスの人口論といふのは、動物の繁殖する率とその食物の繁殖(生産)する率とを比較

して見ると、動物の繁殖する率は非常に高率であるのに反して食物の方の生産率はとてもそれに追いつかない。即ち食物は數學級數的(一、二、三、四といふ風)に進むだけであるが、動物の方は幾何級數的(一、四、八、十六といふ風)に進むのであるから、動物といふものはどうしても食物の不足を生ずべき運命に置かれてゐるのである。例へば一匹の動物は四匹となり十六匹となり三十二匹となりといふ風に増殖して行くのであるが、米とか麥とか野菜とかいふやうな食物類は二、三、四、五、六といふやうな増加しかしないものである。だからそこには自然ある階級のある數の動物が食物を分け與へられないこととなる。人間社會に存在する貧乏なるものも、畢竟この食物の量よりも餘計に人間がゐるからに外ならない。だがたとへ食物の量よりも餘計な人間であらうと生きなければならぬし、又それを公然と殺す譯にも行かない。その結果はその人間が生きて行くために足りないもの、どうしてもなければならぬもの、奪ひ合ひとなる。即ち人間界のみに限らず凡ての生物界を通じて常に悲惨な激烈な生存競争の絶えることがないのである。——以上がマルサスの人口論の概略なのであるが、この論説は當時一般社會から非常に歡迎され好評を博したものであつた。成るほどマルサスが指摘したやうな事實、そつといふやうな計算

法もあるには違ひないが、然しこの人口論が一時歓迎され支持された理由はまだ外にもあるのである。

その他の理由といふのは次の如くである。——當時はブルジョア即ち資本家が段々勢力を得ていた時であつた。そしては彼等は吾々の祖先である多くの労働者を使役しそれに依つて莫大な財富を××し獲得した。彼等が莫大な富を獲得したと同時に多數の労働の労働者は非常に悲惨な生活に突き落されねばならなかつたのだ。この事實は如何に彼等ブルジョア搾取階級が厚顔無恥の徒であらうとも、それが（社會へ多數の極貧者を送り出したことが）自分達の利己主義の結果だといはれては多少自責の念を感じざるを得ない。そこで彼等は考へた、何とかしてこの寢覺めの悪い責任を他へ轉嫁してしまひたいと。かうした時に際して前記のマルクスの人口論が出現して來たのであつた。

「人口の繁殖に伴つて食物は必然的に不足を來すものである。だから社會に貧乏人——飯の食へないものが出来るのは已むを得ない自然的現象である。」とかうマルクスの人口論は説くのであるから、彼等資本家搾取階級が喜び且つ歓迎したのは無理からぬところである。飯の食へない人間

の存在する理由は見事にマルクスに依つて解決されたのだ！「貧乏の存在は俺達のセイぢやない一體人間が無暗矢鱈に増殖するといふことが悪いのだ。」と彼等は嘯いたのである。マルクスの人口論が歓迎され支持された理由は實にこゝに在るのである。

ところでダーキンはこのマルクスの人口論をよんで、成程生物界ではさういふ風に激しい生存競争が行はれてゐるのだなとさう考へた。そして彼の専門である生物學の研究の方についてもやはり同様の現象が認められる。かやうに悲惨な激烈な競争がある場合に、その周圍の事情に適したものは生存するしさうでないものは滅亡する。そこでダーキンは生存競争、自然淘汰といふことを考へついたのであるといふのである。ダーキンは生物學者があるがマルクスのやうな社會問題の研究者から暗示を得て、それに依つてかの有名な一大發見をやつたのである。即ち生物學者である。ダーキンにも當時の社會状態が非常に強い影響を與へてゐるのだ。その當時、資本家階級は商工業の上で激烈な自由競争をやつてゐたのであつた。そこでダーキンも當時の人間社會に於ける生存競争、自由競争に影響されて生物界の現象についてもその方面だけを重視した形があるのである。即ち動物の中に於いての社會的生活を營んでゐる種類については餘り觀察しないで

學獨生活をしてゐる動物の生存競争の方面だけを熱心に研究し強調せられてゐるのである。ダーキン以後に於いて、その學説を紹介する人々もやはりダーキンと同じやうな道を辿つて來たのであつた。

ところがこゝへクロボトキンといふ人の相互扶助説が出現して來た。この相互扶助といふのはやはり進化論上に於けるある一面の法則であつて、ダーキンの言及しなかつたところ重きを置かなかつた方面、即ち動物の中の社會的群國生活をしてゐる動物は相互扶助精神によつて生存競争をやつてゐるといふことを特に説明したものである。そしてこの相互扶助説の發見發表は進化論の上に於いて非常に重要且つ偉大な發見であつたのである。

ダーキン一派の學者達はブルジョアジの立場から一切の事物現象を觀察し認識してゐるから進化論の上に於いてもやはり個體的生存競争の方面に重きをおいてをり、一方クロボトキンは無産労働者階級の立場に立つて觀察し認識する關係上、自然とその着眼點に於いても相違して來るのであつた。然しクロボトキンの相互扶助説といへども、單に進化學上の一説として社會に歡迎され支持を受けたのではなかつた。どちらかといへばこの相互扶助説が有名になつたのは労働運

動なり革命運動なりを實行する人々の間に於いて、自分等の戰鬪の武器としてそれが非常に有効なものであつたからに外ならなかつた。一方プロジョアジがダーキン説を利用するのに對して吾々労働者階級に於いてはクロボトキンの相互扶助説を利用し武器とすることが非常に有効であり、且つは又實際であり眞實であつたので自然それが歡迎され支持され有名になつたのである。

要するに如上の記述を約言するならば、ダーキンは動物中での孤立的生活をしてゐるものゝ進化する法則を發見し、クロボトキンはその社會的生活をしてゐるものゝ進化する法則を發見したのであつた。そして吾々がマルクスは、吾々人類社會に於ける進化の法則を考へ出したといふことになるのである。そしてマルクスの説は、人類社會の一切の進化變遷は階級闘争に依るといふのであるが、このマルクス説については以下章を追つて追ひつゝと論述して行くことゝなる。

八 プロレタリアを護る學問

マルクスの諸學説に觸れる前に尙ほ少しこゝで述べておきたいことがある。それは外でもないが諸君も既に御承知の如く、現在社會に於いては資本家階級と労働階級との間に激烈な階級闘争

が行はれてゐる。これは誰しも否認しない事實であつて如何とも仕様のないことである。ところがこの階級闘争はいろ／＼な形態を取つて現はれて來るものなのである。即ち政治上に於いて、經濟上に於いて、又思想上に於いて等々。従つて階級闘争と一口にいはれてゐる中にも政治的闘争、經濟的闘争思想的闘争といふやうに幾つにも分かれてゐるのである。そこで吾々労働階級が資本家に對して××する場合には、經濟的には労働組合を作つてその團體の力に依つて資本家に對抗するといふ形を執るのである。又政治的には労働階級が自分達の政黨を作つてその政黨を通しての社會運動、労働運動に依つてブルジョアと戦ふことになるのである。ところがその組合運動と政治運動とだけでは戦闘力がまだ充分ではない。それを補ふためにこゝに今一つ思想戦の方が残つてゐる。つまり吾々がブルジョアと戦ふためには、組合による團結の力と政黨との外に尙ほ學問上の戦ひが必要となつて來るのである。労働者階級自身が自分のための學問を建設してそれを以つて彼等ブルジョアの學問と戦ひそして征服する必要があるのだ。けれどこれは容易な業ではない。といふのは権力者階級、支配者階級征服者階級なるものはその名の示す通りこの社會の一切——經濟的にも政治的にも思想的にも——を支配し征服してゐるからである

この三つの支配形式の中でその根本となつてゐるものは固より經濟的支配であるが、既に經濟的に支配し壓服してゐる以上は必然的現象として政治的支配を要求し、又政治的支配なるものは更に進んで思想的支配をも要求し必要とするものである。

で、吾々は先づ第一に經濟的に壓服され支配されてゐる。經濟的な獨立が全然與へられてゐないのだ。次は政治的支配を受けてゐる結果として一切の自由が許されてゐない。次には吾々が思想的に征服されてゐることは必然的に獨立の（吾々階級の利益のための）學問を有つてゐないことになる。學問の機關としては學校があるけれども、それらの殆んどすべては支配階級乃至はブルジョア階級のためにその教導の權力を掌握されてゐるものである。従つてそれらは吾々の利益のための何ものをも教へない。更に又新聞雜誌から宗教書に至るまでその十中の九分九厘はブルジョア支配階級のために——その利益のために利用され動いてゐるのだ。結局すべての學問知識は彼等支配階級ブルジョア階級の獨占するところで、吾々被支配階級無産者階級は何等の獨立した教育機關を持つてゐないことだ。即ち労働階級の多數のものが學問なく知識のないのはこのためである。彼等支配者階級は知識を獨占してゐる結果、あらゆる機關を通じて自分達の利益に

身乃至は自分達階級のための利益になる學問との二つである。

さて、今日の社會にはブルジョアとプロレタリアの二つの階級が明かに存在してゐる。従つて前述の如く學問に二つの形、ブルジョア階級の學問と吾々プロレタリア階級の學問とが存在する。酸素と水素と合せて氷が出来上る。これは兩階級とも異存がない。さういふやうな自然科学の方面は先づいゝとしても、今度は人間社會の學問になつて來ると明かに對立して來るのだ。諸君の中には經濟學を學んだり政治法律を學んだ人々もあるであらう。が、しかしそれらはブルジョア階級の經濟學、政治學、法律學であつて決してプロレタリア階級のためのそれとして教へられたのではない。一言にしていふなら、支配階級なるものは精神が物質を支配するのだといふことを吾々被支配階級の頭に叩きこまうといふことがその教育の根本になつてゐるのである。支配階級が知識を獨占して精神を以つて物質界を支配する、といふことがその基底になつてゐるのだ。これを逆にしてみると、被支配階級の方では物質で以つて精神を支配するといふことになつて來るのである。前にも記した通りブルジョア階級が封建的勢力に對して戦つた時には、彼等は物質主義者であつたのだ。それは封建的權力と闘ふためには必要なものであつた。しかし今度は自分達よ

り下の吾々労働者階級を支配し壓服する必要を生じて來た今日では、上下顛倒して彼等は精神主義に走つてゐる。今日世に存在する學者なるものゝ殆んどすべてのものは、皆この精神主義の識美者であり擁護者なのである。それは彼等自身が經濟的にか思想的にかブルジョア支配階級に屬してゐる人間だからである。

で、諸君が若しこのブルジョア階級に對して××するならば、自分の上に位して吾々を支配し壓服してゐる權力に對して××××ならば、何よりも先づ物質を以つて精神を支配するといふことが必要なのである。精神主義を捨て、物質萬能主義で押し通すといふことが、思想獨立の第一要件であり吾々階級の利益のための學問を建設し獲得する第一歩でもあるのだ。

九 精神と物質 (一)

さて、いよいよこれからマルクスの發見發表した諸學說中最も重要であり且つ偉大なるところの、史的唯物論の説述に及ぶこととするのであるが、それについては先づ唯物史觀と唯物論との關係はどんなものであるかといふことが當然研究の順序となつて來るのである。

現在の社會に於いては對立存在してゐるところの唯物論と唯心論といふ哲學上の二大別の差異は、一體どういふところに存するのであらうか？ 普通今日一般社會に於いて唱へられてゐるところに従へば、唯物論とは即ち物質主義の同意語であつて下劣な、野卑な、下らないものゝことであるといふ風に斷定されてゐる。これに反して唯心論の方は即ち精神主義、理想主義であつて非常に高尚な、尊嚴な、善美なものであるといふ風に批判されてゐる。ところが現在の社會組織の下にあつては、善にも惡にも二た通り(ブルジョアジーのいふ善を惡、プロレタリアートのいふ善と惡)の種類の見方があるのだから、世間のある人々が善と考へるものでも「他のある種の人々が必ずしも善と考へるには決つてゐない。即ち世間で(こゝで世間でといふ言葉はブルジョア支配階級でといふことを意味してゐる。)下劣となし野卑となし下らないとするところの、その唯物論を自ら喜んで支持し奉じてゐる吾々の如きマルキシストもあるのである。若しも唯物論が下らないものであると決定されてゐるものならば、恐らくこの世には唯物論者といふものは存在しない筈である。然るに吾々はその下劣であり下らないものと云はれてゐるところの(ブルジョア支配階級からだ。)唯物論を奉ずる唯物論者である。しかもそれを奉ずること信ずることを以つて誇りと

さへしてゐるものである。

惟ふに、苟くも生理的に何等の欠陥もなく相當物を考へ事理を辨へてゐる人々が、自ら唯物論者たることを以つて誇りとしてゐる以上は、そこに、必らず何等か相當の理由と、それに對する信念がなければならぬ。吾々は信じてゐる。吾々はいふ、「唯物論と唯心論との差異は極めて簡單明瞭なものである」と。即ち、唯心論はこの物質の世界を本當の實在、本當の存在と見てゐないのだ。本當の實在としてはたゞ精神があるだけである。物質界の現象といふものはこの精神の幻影に過ぎないのだ、精神が物質の上に現象されてゐるに過ぎないのだ。だから物質的な現象ばかりを考へたり見たりすることは本當の考へ方、本當の認識方法ではない。そこで本當に哲學的な立場からこの現實界を批判するためには、物質以上に登つて精神的にそれを批判し認識しなければならぬのである。と、先づ唯心論者の言ひぶんは大體以上の如くである。これに對して吾々物質論者、唯物論者は次の如くいふ……吾々は五官を持つてゐる。この五官の働きに依つて一切の現象世界を認識するのである。そしてこの五官の働きに依るより外には、絶対に外物を認識し批判する方法は求められないのだ。だから吾々人間の知り得るところ見得るところは、たゞこの五官

の働きに依つて得られる事柄であつて、この五官の働きに依つて得ることの出来るものだけが唯一の事實であり眞實であるのだ。それより以外の事實といふものは絶対にあり得ない。唯心論者は精神々々といふけれども、その精神なるものの實體は何であるかといふと、畢竟この物質界の反映に過ぎないのではないか！ 唯心論者は物質は精神の幻影に過ぎないといふけれども、物質論者はその反對に精神は物質の反映に過ぎないと断言して憚らないのである。何故かなら、外界の物質が吾々人間の心裡に反映されたものが即ち精神といはれてゐるものに過ぎないからである。五官の働きを通じて得たところの感覚が頭の中でいろいろに分解されたり結合されたりする、それが即ち精神現象に外ならないのだ。従つて唯心論者のいふ如く、精神が根本でなくて、物質が吾々人間の根本となつてゐるのだ。と。

ところで、今一つ、次のやうな議論をするものがある。——唯物論者は精神主義、理想主義に反對するけれども、その唯物論者を以つて任ずる社會主義者が社會の將來に對する理想を説いてゐるのはどうした譯か？ これが抑も唯物論者社會主義者の犯してゐる一大矛盾ではないか？ と、こんな水掛論のやうな下らない議論を詳しく論じてゐると、この貴重な紙面を無駄に汚す虞

れがあるからほんの一矢の應酬を試みておくこととする。

この「理想」といはれてゐる言葉にも二様の意味が存在してゐる。唯心論者からいへば精神が根本であるのだから、その精神を物さしとして考へることが所謂精神主義者の理想とするところである。そしてその理想に依つてこの物質界のことを處置して行かうといふところに理想主義が成り立つてゐるのである。けれども御承知の如く物質論者は元來物質のことばかり論じてゐる。従つて理想といはるべきものゝある筈がないのだ。彼等は吾々が理想を説くのは矛盾であり滑稽であるといふ。然し吾々唯物論者にはせればそれは何の不思議でも矛盾でもない。吾々は確かに物質論者であるが、しかし吾々物質論者と雖も現在社會に於けるやうな物質的關係に對しては不満足といふよりはむしろ憤怒をさへ感ずるのだ。そこで吾々は吾々に與へられた現在の物質的關係を過去現在の經驗に依つて造り變へようと考へる。従つてそこには當然の結果として吾々のための實際的理想が生じて來るのだ。唯物論者が理想を持つたと何の不思議もないと同時に前にも一寸述べた通り同じ理想といふにしても其内容に於いては甚だ相違があるのである。——家を建てるためにはその家としての設計が必要である。その設計は即ち實際的理想なのだ。唯物

論者であるところの社會主義者が、新××建設の設計、即ち實際的理想を有つたとて何が矛盾であり不思議であらうか！ 否むしろそれは當然であり欠くべからざる必要事であるのだ。只吾々が反對し排撃せんとするものは、唯心論者達の精神的哲學的な理想主義である。

一〇 精神と物質(二)

さて、前章に述べた實際的理想と哲學的理想とは全然相違したものである。先づ哲學理想とはどんなものであるかといふに、例へば貧乏はつらいといふことは明瞭な事實であつて少しも怪しむには足りない人情の自然である。吾々は今それを逃れる方法がない。そして貧乏がつらいといふ事實はどこまで行つても事實である。ところがこの貧乏の苦しみから何かして逃ける方法はないだろうかと云ふので、そこで誤魔化しの理想主義が生れて來たのだ。即ち貧乏は却つて幸福である、神様はお前達の意志を強固にするために貧乏を與へ給ふたのである、今貧乏しておけばやがて將來乃至はあの世へ行つてから樂になりいゝことがある、斯様に考へ且つ教へ込むのが謂ふところの理想主義に外ならないのだ。

又、金持が泥棒に入られピストルを突き付けられて危険だつたが、しかし貧乏なものにはさうした危険がない。如何に凶惡な強盗だつて一部屋に五人も六人も雜魚寝してゐる貧乏人の家へ行つては、金を出さぬからといつて切つたり殺したりはしない、だから金持よりも貧乏である方が氣樂で安心だ。などゝこれも貧乏な境遇をごまかし諦めさせる理想主義の罪科である。哲學的精神的理想主義とは取りも直さず諦め主義でありごまかし主義であり眼かくし主義に外ならないのだ。

次に人間は誰でも一度は死ななければならぬ。これは争はれない事實でありこれを否定する馬鹿もあるまい。けれども死ぬことは誰しも好まない。これも亦争はれない事實で人情の然らしむるところである。そこで人間をこの死から救ひ出すために(實はごまかすために)死んでも尚ほ命があるなどゝいふ理想主義が作り出されて來たのである。宗教の未來觀なるものが即ちそれである。この人類社會には、否この社會が資本主義組織であるが故に、いろ／＼な苦痛と悲慘に充ち満ちてゐる。それを以上のやうな理由ならざる理由を以つて吾々人間を××××××××××に服従せしめやうとするのが理想主義である。そして意久地のない無知な、ある一部の人々はそれを有難がり満足してゐる。ブルジョア支配階級からみれば、さうした意久地なしや諦め屋や妄信

元來さういふ學說の出て来る因由を檢討して見ると次のやうな次第となるのである。唯物史觀はいろいろな實證が擧つてゐるのでそれを承認しない譯には行かない、けれどもそれを根本的に承認するためには從來の學問を全部拋棄し覆滅しなければならぬことになる。それは非常に重大なることであるし又普通一般人の頭には何かの宗教的思想が詰め込まれてゐたり、精神主義的な哲學思想が入つてゐたりするものである。少し學問らしい學問をした人達の頭には、尙ほさらそれが深く刻みつけられてゐるものである。それを一朝にして拋棄しひつくり返すことは容易なことではない。その結果は何とかしてそれを生かさうとする曖昧な妥協策が考へ出され作り出されることとなる。さうした折衷主義に據つた方が、唯物史觀を主張する人としても部分的な問題として取扱ふことが出来るのであるから、根本問題に觸れる必要がなくて甚だ便利である。又その主張を聞かされる方の人としてもさういふ方法でならば少しづつ肯定して行くことが容易である。殊に西歐の如くキリスト教、思想の普遍化されてゐる社會では、右のやうな妥協策によつて説き進める必要がかなり多いのである。いづれにせよ、とに角唯物史觀は必ずしも唯物論ではないのである。根本の哲學論などはこの場合問題外で、それはどうあらうと今吾々が論議せんとするものとは傳りがないのである。

さて、從來の歴史論としては先づ大人物主義といふのがある。即ち謂ふところのグレート・メン・セオリーである。歴史はすべて英雄豪傑、偉人聖人の出現に依つて進展し變遷して行くのだ、歴史上にいろいろな變遷發達が有つたのはすべて英雄豪傑偉人などいふものが現はれて、さういふ人々の思想や行動に依つて一般社會人が影響され誘導されて行くからである。人間及び社會の歴史上のことなどには、理論學のやうな自然法が當嵌まるものではなく、英雄豪傑偉人などの自由意志に依つて如何様にも變轉して行くものである、といふのである。

今一つの歴史論としては、およそ人類の歴史はすべて神の意志の發現であると簡単に説明してゐるものである。この簡単な説明を今少し説明していつてみるならば、人類社會の歴史が發達して行くのはキリスト教の理想を實現させるために、過去現在に於いて見る如き形式をお執りになつてゐるのだ、といふことになるのである。又キリスト教の理想とはいはないまでも、文物制度、正義人道などいふやうな目的基準があつてその理想に到達するために、人類が歴史的な過程を過程し歩んでゐるのだといふやうな珍説もあるのである。要するにすべてこれらは人間の歴史は

人間の思想の變化に依つて開展し變遷して行くものである、といふところに止まつてゐるのである思想が變化しその結果として人類社會が出来上るのだ、古來歴史上にいろいろな制度を生じてゐるが、その制度の變化發達といふことは皆人間の頭腦から浮び出る思想の發達變化の結果である、といつてゐるのである。以上が大體に於いての今日までの普通な歴史の見方、考へ方であつたのだ。

ところが實際的な吾々の奉ずる唯物史觀は全然右のものとは反對な立場に在るのである。即ち社會が進展變化するのは思想の爲ではなくして、その社會の物質的條件が發達し變化する結果である。社會の物質的條件が進展變化するに従つてその社會の思想も亦變化して來るのだ。従つて又社會の文物制度なども變化することになるのである。この物質的條件といはれる中には種々雑多な要素を含んでゐることは勿論である。人間の種類の如きもさうした條件の一つであつて、歐羅巴人とか日本人とか印度人とかいふやうな差別のあるのが即ちそれである。それから又人間の住む土地の異なること、即ち歐羅巴とか日本とか印度とかいふやうにそれ／＼に地理の差がある。此の地理の差といふものが又いふところの物質的條件の一つなのである。次にはその地理の差に

従つて氣候の差がある。即ち熱帯があり温帯があり寒帯がある。これも勿論物質條件の一つである。しかしこれらのものはすべて吾々人類が社會的生活を営む上に於いての自然的要素である。

この自然的要素の外に尙ほ吾々の生活には經濟的要素といふものがある。吾々人間は他の低級な動物とは異つてゐて、單に自分の體や手や足ばかりで生活してゐるものではない。人間はいろいろな科學知識を利用し發明しそれに依つて生活してゐるものである。即ち道具や機械を利用して生活してゐるのだ。吾々は食物を取るために或は饑餓を避けるために、或は又風雨を避けるために、いろいろな道具や材料を使つてそれを行つてゐる、即ち鋤鉞を使ふとか或は家屋を建てるとか或は網や鐵砲を使用するとかいふ風に。又現今ではいろいろの大機械が發明され製作されてゐる。その器具機械といふものが吾々の生活に對して非常に重大な要素になつてゐることは誰しも否定することの出来ない事實である。即ちこれら一切のものが物質的條件中に於ける經濟的要素といはれるものなのである。自然的要素に對して人爲的要素ともいはれてゐるところのものである。

一二 進化の第一要件

人間生活の物質的條件は前章で説明したやうに自然的要素と経済的要素との二つに分れてゐる。そして自然的要素中に含まれるものは人種、地理、氣候等であり、経済的要素中に含まれるものは器具機械、材料等々一切の人爲的経済的動的なものである。然らば自然的要素と経済的要素とはどういふ様に異つてゐるか、そして又人間生活の幸福のためにはどちらが主要であるか、といふならば唯物史観論者はこの二種の要素の中で、自然的要素の方はそんなにも重要なものではなく、経済的要素が最も重要であり且つ必需ひつじふなものであると主張するのである。何故ならば自然的要素といふものには變化が少くないといふより殆んど變化がないといつてもいゝほどである。地理は勿論のこと、人種にしろ氣候にしろ皆一定してゐて動かないものばかりである。だから自然的要素といふものは殆んど進化といふことには關係がなく、従つて社會が變化し發達する原因にはならないものである。これに反して経済的要素の方は非常に重大且つ缺かくことの出来ない役割と力を有つてゐるものであるからだ。

例へば一枚の布を織るにしても昔ならば糸引車でピン／＼やつてゐたものが、今日では非常に尨大はげだな紡績機械で糸を製造しそしてやはり非常に精巧に出來てゐる機織はたをり機械でドシ／＼布を織つてゐるのである。さういふ具合に器具機械の出現利用といふことは非常に偉大な變化を社會上生活上へ與へるものである。但しこの場合に自然的要素が全く何等の影響えいぎやうをも與へないのでない。自然的要素も永い間には多少の變化を起すものであるから、その變化する程度に於いては、やはり社會に影響のないこともないのである。即ち人間がまだ／＼幼稚えうぢであつた時代、器具や機械といふものが未だ發明發見せられないで極めて貧弱なものであつた時代、つまり吾々人間の祖先達が自然界を征服するだけの力がまだ無かつた時代には、氣候が少し變化すればそれがために非常な影響を受けたのであつた。氣候が寒くなれば今迄の器具や機械では寒さに堪え兼ねて生活が出來なくなるのであつた。故に社會が幼稚であつた時代にあつては自然的要素も相當な影響を與へてゐたのであるけれども、それは極く僅かなものであつたことは推して知るべきである。況んや今日の如く社會の文物が進歩發展して來て、いろんな器具機械の力に依つて自然界を征服する力が強大無限きやうたいむげんになつて來た以上、自然的要素といふものは殆んど何等の働きをも社會に及ぼさな

くなつたのである。吾々は今日では暑くても寒くてもさままでの影響を受けないでゐられる。即ち寒ければストーヴとかスチームとか電熱器などがあり、暑ければ暑いで扇風器もあれば冷凍装置なども完全して來てゐる。かやうに今日の科學の力は自然界を征服してゐるが故に、吾々唯物史觀論者は自然的要素を社會進化の要素中に入れないものである。従つて社會が變遷發達する第一の要因は斷乎として經濟的要素であることを主張するものである。

從來新しい史論上の意見としてイギリスのバツクルの文明史がある。これは非常に有名なものではあるが、そのいふところに依れば各國に於ける歴史上の發達は主としてその人種とか地理とか乃至は氣候とかいふやうなものに依つて決定されてゐる。即ち物質的要素中の自然的要素の制裁を受けるものであるといふのであつて、これは非常に新しい學說として喜ばれたのであつたがやはりこれも一種の唯物的歴史觀なのである。しかしバツクルは肝腎の經濟的要素については一言も言及してゐないのである。そこで吾々がマルクスはバツクルの見るところよりも一步を進めて、自然的な要素以外に尙ほ經濟的な要素の方が却つて重要不可缺であるといふことを説いたのである。この點に於いてマルクスの歴史觀がバツクルのそれと比較して迥かな進歩を示してゐる

のである。そしてこの點がマルクスの唯物觀が全く新しい歴史觀として批判された所以であつたのである。

さて、唯物史觀は人間社會の經濟的要素、即ち道具や機械を以つて衣食住を生産する方法を社會進化の第一の要件とするものである。又その生産した衣食住の資料を如何にしてそれ／＼の間に分配し交換するかといふことを重要最大な問題と考へるものである。即ち社會制度の變化發達は生産と分配との方法如何に在ると斷定するものである。——或る時、或るところに於ける人間の社會ではその社會に必要な物資を如何にして生産してゐるか、そしてその生産されたものは如何にして分配し如何にして交換してゐるか？といふことがその社會に於ける基礎であり根本問題なのである。その生産、分配、交換の方法が變化すればそれに従つてその社會の制度も組織も變化して行くものなのである。社會の制度とか組織とかいふやうなものは、決して正義とか人道とか眞理とかいふやうなものに依つては進歩して行くものではない。又思想とか精神とかいふものに依つて發達して行くものでもないのである。たゞ前記の生産、分配、交換の方法の發達變化に伴つて進歩し變化して行くものなのである。これを言葉をかへていふならば、社會の進歩

發達する原因は哲學に無くして社會經濟に在るといふことに歸着するのである。

以上の如き考へ方、物の見方がマルクス、エンゲルスに依つて初めて發見されたのであつた。尤もある批評家に云はせるとマルクス、エンゲルスよりも以前にこれと同じことを發表したものがあつたといつてゐる。しかしそれはすべての大發見に先立つて、その先驅と目すべきものが常に存在してゐると同じ理合で斷片的にさういふやうな意見を發表したものが事實あるには相違ないが、それをマルクス、エンゲルスの如く組織的に明晰に且つ有力に學説化したものは他にないのである。マルクスとエンゲルスとは殆んど同時にこの思想に到達した人であつたが、その後二人は常に一心同體として社會に立ち、そして謙遜なエンゲルスは常にマルクスの補助的協力者の立場に甘んじてゐたので、一口にいふ時には唯物史觀の創設者はマルクスといふことになつてゐるのである。

ところで、マルクスの著書は實に尨大な數に上つてゐるが特に唯物史觀といふやうな題目を掲げて著述し發表したものは一冊もないのである。勿論マルクスの著書全部がこの唯物史觀の説明であり利用ではあるが、特にその題目を論じたものは一つもないのである。こゝに只一つ「經濟

批評」といふ書物の序文の中に、唯物史觀の大要を極めて簡潔に記述してあるところがある。これは非常に重要な文献として有名なものである。以下この文献についてマルクス説の根幹を成してゐるところの唯物史觀を、極く分り易く簡単に記述して行くこととする。

一三 生産と社會機構の變遷

マルクスは云ふ。

「人間が社會的にその生産資料を生産する時、ある種の必然的なる、自己の意志より獨立したる關係を作るものである。その關係は即ちその社會に於ける物質的生産力の發達程度に相應する生産關係なのである。この生産關係の總和が社會の經濟的構造を爲すのであつて、法律的及び政治的の上部構造を作り上げる眞實の基礎であり又これに相應するある種の社會的自覺を生ぜしめるものである。この物質的生活資料の產出方法が、社會的、政治的及び精神的の一般生活上の過程を決定するのである。人の意識が人の生活を決定するのではなくて、その反對に人の社會生活が人の意識を決定するのである。」

さて、吾々人間が若し個々別々に生産をして個々別々に生活してゐるのであるならば、そこには何等の關係をも生じないが、人間が社会的に即ち多數が群集合同して衣食住の資料を造り出す時には、その個々人の間には必ず何等かの相對的な關係が生じて来る。そしてその關係は決して個々人の意志通りには行かないものである。實際上の必要に迫られて「自己の意志より獨立したる關係」が必然的に生じて来るのである。それがその時代の「生産關係」であつて、その生産關係は「その社會に於ける物質的生產力の發達程度に相應する」ものであるのだ。石器で狩獵したり耕作したりした石器時代にあつては、社會の生產力がまだその程度にしか發達してゐないのであるから、従つてその發達程度に相應した生産關係が生ずるのである。次に鐵器を使ふ程度にまで社會の生產力が發達してくれば、又その程度に相應する生産關係が生じて来るのである。さうした生産關係の總和が、即ち種々なる生産關係を一括したものがその社會の「經濟的構造」なのである。そしてその經濟的構造が眞實の(實質上の)基礎となり地盤となり、土臺となつてその上に政治とか法律とかいふやうな「上部構造」が出来上るのである。普通に人の眼に見える建築物は「上部構造」だけであるが、しかしその眼に見える上部構造は一寸見ただけでは見るこ

との出来ない地下の基礎工事の上に立つてゐるものなのである。この社會のことにしてもこの理窟と同様であつて、普通一般には政治とか法律とかいふものだけが人の眼につくのであるけれども、それは一寸見ただけでは認めることの出来ない「經濟的構造」といふ土臺の上に立つてゐるものであつて、その經濟的構造の出来方に依つて政治も法律もその形、その構造が變つて来るのである。

更に又その土臺であり地盤である經濟的構造と、その上部構造である政治法律とに伴つてそれに相應する「社會的自覺」といふものが生じて来るのである。即ち道德とか宗教などいふ思想や感情がその社會的自覺なのである。だから結局「生産資料の產出方法が社會的、政治的及び精神的、一般生活上の過程を決定する」といふことが出来るのである。從來「人の意識が人の生活を決定する」即ち人の思想に依つて人の生活方法が定まる、乃至は定められると考へられてゐたのであつたが、實はさうでなくて「人の社會生活が人の意識を決定する」即ち生活方法の如何に依つてその人の思想、自覺、意識が定められるのである。

以上の事柄をもつと分り易く記述してみるならば、例へば昔。武士といふものがあつて刀を二本

腰にぶツ込んで威張つてゐた。その下に百姓といふものがあつて武士の所領である土地を耕して穀物を作り出してゐた。百姓が作り出したその穀物は武士が取上げてしまつて武士と武士との間に分配してゐた。そして百姓は僅かに取残された分だけを自分達の食料として使用してゐた。そこでその生産分配が當時の武士と百姓との間に於いての及び武士と武士、百姓と百姓との間に於いての一種の關係を生じた。これが封建時代の生産力に相應する生産關係であつたのだ。ところがその經濟的構造を基礎として當時の政治上及び法律上の封建的諸制度が出来てゐたのである。更に又それに伴つて封建的思想、道德、宗教及び心理が生じて來たのである。例へば武士はその領内の支配をする、百姓はその支配を受ける、そして武士たるものは百姓に對して切り捨て御免である。さういふ政治が生じ、さういふ法律が生じたのである。又それに伴つて武士といふものは偉いものである、それに反して百姓といふものは牛か馬のやうなものである、だから武士がどんなに無理なことをしても百姓階級はそれに反抗してはならない。といふやうな氣風が生れて來たのである。それらの心持が段々普通のこととなり習ひ性となつて當時の道德を作り宗教を作り、哲學を生み藝術を生むに至つたのである。

さて、以上述べた生活と思想との關係についてこゝに又一つの面白い話がある、といふのは外でもないが労働問題が我國に於いても喧しく云々され初めたころのこと、河上肇博士が何かの紙上に次のやうなことを書かれたことがあつた。——今日の經濟界では労働は一種の商品となつてゐる、資本家は金を出して原料を澤山仕込み、又金を出して機械を備へ付けてその機械で原料を製品にするのであるが、そのためには是非とも労働といふものが必要なので労働者を雇つて來て働かせる。資本家から見れば、労働者といふものは機械や原料と同じやうに一種の商品として買ひ入れるのである。と。ところがそれを讀まれた姉崎博士が非常に憤慨せられたのである。姉崎博士は有名な理想主義家であつたのだ。で博士は——苟くも人間をつかまへて商品視するとは怪しからん、労働者を商品として賣買するなどは實に怪しからん、さういふ不都合な、人間を商品視するといふやうな不都合な思想が存在してゐる間は、とても労働問題の解決は出來ない。——とかういつて姉崎博士は憤慨されたのであつた。これをウツカリ聞いてゐると如何にも尤もらしく聞えるではないか。

で姉崎博士が右のやうなことを河上博士に突込んで行くと、河上博士はそれに答へて次のやう

に言はれたのであつた。——イヤ自分は決して労働者を商品視するものではない。現在の經濟組織の下に於いては、即ち資本主義制度の下に於いては事實上労働者は商品視されてゐるのだ。自分はその事實を擧げて事實を事實として語つたに過ぎない。たゞ事實を觀察してその觀察を述べたに過ぎないのである。自分が労働者を商品視したのではなく労働者を商品視する事實があるから、それで經濟界に労働者を商品視する思想が生じてゐるのだ。さういふ思想のある間は労働問題の解決は出来ないと姉崎氏はいはれるが、さういふ事實のある間はさういふ思想は無くならないのである。思想があるから事實が生ずるのではなくして、事實があるから思想が生ずるのである、思想を無くするには先づその根本となつてゐる事實を無くしなければならぬ。その事實があるために、現に今日のやうな労働問題が生じて來るのである。——と河上博士は姉崎博士を反駁したのであつた。これを吾々の眼から見れば實に當然のことなのであるが、精神主義者、唯心論者たる姉崎博士から見ればやはり自分の考へ方が正しいと信じてゐるのであらう。この點が所謂二種の眞理——プロレタリア階級のそれとブルジョア階級のそれ——の存在する所以で如何にも仕方のないことであるのだ。そこにはたゞ兩眞理間の戦ひ、闘争が残されてゐるばかりなのである。

一四 社会××の因子

更にマルクスはいふ、

「然るに社会の物質的生産力はその發達のある階段に於いて、現在の生産関係と矛盾することとなる。換言すればこの生産関係の法律的表示に過ぎないところの、そして従來この生産力を自己の内部に活動せしめてゐたところの財産関係と矛盾することとなる。即ちこの関係が生産力の發達形式たることから一變してその障礙物となるのである。こゝに於いて社会××の時代が始まるのだ。經濟的基礎が變化すると共にその巨大なる上部構造の全部も亦、或は徐々に或は急激に××されるのである。」

生産関係と上部構造との關係については前章に於いて記述した通りであるが、社会の生産力といふものは常に發達してゐるものであることは諸君の常に見らるゝところである。そしてそれが或る段階にまで發達して來ると現在の(その時の)生産関係と矛盾して來ることになるのである。

しかし矛盾を生じたならばその生産関係を改變さへすればいゝ譯であるが、事實はさう容易に改められないものである。何故かなら生産関係なるものが直ちに社會の、或はある階級の人々の財産関係となつてゐるからである。即ち生産関係が所有權關係として法律上に確定されてゐるかである。財産關係即ち所有關係は生産關係の法律表示に外ならないのである。

生産關係は從來その財産關係の内部に活動してゐたものであつたが、今日の階段にまで發達して來るとその財産關係と矛盾して來るのである。從來に於いてはその財産關係に依つて生産力が發達して來たのであつたが、即ちその財産關係が生産力の發達形式であつたのであつたが、今日ではそれが却つて生産力發達の障礙物となつて來てゐるのである。こゝに於いて社會××の時代が初まるのである。即ち舊生産力に相應した舊財産關係の均整を破壊して、新生産力に相應するところの新財産關係を作り上げる運動が生起して來ることになるのだ、つまり社會の經濟的基礎が變化するにつれて、その上部構造たる政治法律思想等々の一切の制度と組織とが××されて行くのである。

さて、以上の論説を更に分り易くするためこゝでも亦例を擧げて説述することにしよう。――

封建時代には武士が土地を領してゐてその下で百姓が米を作つてゐた。百姓の農業が當時の生産力であつたのだ。前章にも記した通りその生産力に相應する生産關係が即ち武士と百姓との關係であつて、それが武士の支配權、領土權、財産權として法律上に確認されてゐたのであつた。然るにその封建制度の下に農業以外の商工業が次第に發達して來たことは周知の通りである。即ち新しい生産力が發達して來たのであつた。するとその新生産力がある段階にまで發達したところで、農業を基礎としたところの武士と百姓との關係と矛盾して來たのである。從來では商工業は封建制度の内部で活動させられてゐたのであつたが、今ではもうその内部だけでは發達することが困難になつて來た。即ち生産力と生産關係との矛盾が生じて來たのである。従つて封建制度は新生産力を發達させるための形式ではなくなつて、却つてその障礙物となつて來たのである。ここに於いて所謂社會××の時代が始まり我國では明治維新の××に依つて封建制度が崩壊したのである。農業生産の基礎が變化して工業生産の時代となつたので、自然上部構造たる武士の支配權もそれと共に變化したのである。そして商工業を基礎とする明治の新社會が出現したことは諸君の見らるゝ如くである。

「階級闘争」といふ言葉はこゝに解説してゐるマルクスの文献中には使用してないが、右に述べたやうな商工階級が武士階級に反抗して遂にそれを打倒したといふやうな戦ひのことを、吾がマルクス及びエンゲルスは「階級闘争」と名づけてゐるのである。右兩人の共著であるかの有名な「共産黨宣言」の冒頭において「由來、一切の社會の歴史は階級闘争の歴史である。」と明記されてゐるのである。

更にマルクスはいふ、

「これ等の××を考慮するに就いて、科學的に眞實の立證を爲し得べき、經濟的生活條件の物質的××と人がこの矛盾を意識してこれと決戦せんとするより起る法律的、政治的、宗教的、美術的、哲學的、これを一言にしていへば精神的××とを、常に善く區別する必要がある。吾々がある個人を批判するに當つても、決して多くその人の自ら考ふるところに依らざると同じく、吾々がかゝる××時代を批判するに際しても決して多くその時代の意識に依ることは出来ない。吾々はむしろその物質的生活の矛盾の中からして、この意識を説明せねばならないのだ。即ち、社會的生産力と生産關係との間に存する矛盾に依つてこれを説明しなければならぬ

いのである。」

前にも前述した通り社會××が惹き起されるに際しては、その一面は物質的××なのである。即ち經濟××、生活條件の××なのである。そしてそれは科學的に事實的に立證することが出来るのである。けれども他の一面に於いては又精神××も起るのだ。即ち政治的、法律的、宗教的等々の××が生起するのである。そしてそれは人が經濟上の矛盾を意識してその矛盾を解決しようとする心的の努力から起るものなのである。この物質的××と精神的××とを常によく區別する必要がある。吾々が一人の人間を批判する場合に於いて、あの人のいふことだから間違ひはないなどとよくいふけれども、それはむしろ皮相的な觀察であつて本人のいふことなどは滅多に當てにならないものではないのだ。その人の考へつかないところ、氣のつかないところ、無意識なところに多くの場合その人の行爲の本當の原因が存在してゐるものなのである。これと同じやうに××の場合に際しても、その××運動に携はる人々の考へ若しくは「その時代の意識」は、多くの場合本當のものではないのである。吾々はさういふやうな社會意識に依つてはその時の眞事實を知ることが出来ないのだ。吾々はむしろその當時の生活上の矛盾、生産力と生産關係との矛盾に依つてそ

の意識を説明しなければならぬのである。

一五 意識以外の眞實

さて、明治維新が経験したその革命の経緯は、よく右の事情を如實に物語り實證してくれるものである。即ち明治維新の際に於いては、封建制度を打倒して資本主義制度を建設しようとするのが物質的の要求であり、経済的の要求もあつたのであるが、當時の革命家の頭の中にはさういふやうな意識は少しも存在せず亦た、意識してもゐなかつたのである。彼等の頭の中に存在し意識されてゐたものは「尊王攘夷」とか「王政復古」とかいつたやうな精神的な要求のみで充ち満ちてゐたのである。明治政府が出来上つてからでも「××××」などいふ立派な看板だけは掲げられなければ、その實質に於いては少しも××××ではなかつたのである。それはたゞ資本家階級をして封建武士に取つて代らしめるといふ××××××××な要求を理想化したものにしか過ぎなかつたのである。即ちこの點が物質的××と精神的××との關係を如實に物語つてゐるものである。従つて若し吾々がその理想化された表面上の精神的合言葉に依つて維新革命の眞相を知らう

とするならば、それはとんだ誤謬を犯すことになつてしまふのだ。故に吾々は右の如きとは全然反對に、經濟上物質上、の眞事實に依つてその××××××××批判し解釋するやうにしなければならぬのである。

諸君は或はまだ知らないでゐるかも知れないがよく新聞紙上の廣告などに、國家のため、國富のためなどと如何にも愛國的犠牲的な事業であるかの如く見せかけた、營利會社の設立趣意書などを發見するであらう。又純粹の商品を販賣するために、やつぱり愛國とか人道とか慈善とかいふやうな美詞麗句をつらねて、一頁大の廣告をしてゐるものなどしばしば見せつけられるであらう。それらは大抵誰が見ても直ぐウソであり儲けんがための悪辣な搾取方法であることが見抜かれるけれども、まだウソであるといふことが容易に分らない飾り言葉や方法が今日の資本主義制社會の下には横行してゐるのである。それは容易に分らない筈で、その場合には右の廣告などとは違つてそれをいふ本人が眞面目にさう信じ切つてゐるからである。

例へば子供が夜遅くまで起きてゐると何だか無暗と氣嫌が悪くなつて、お母さんを困らせることがよくあるであらう。何とかあやして氣嫌を直させようと骨折つても中々直らない。あゝ坊や

はねむいんだね、好い子だからお寝み」といつても「いゝやねむくはないんだ」といつてますます氣嫌が悪くなるばかりである。そのくせ目はもう眠さうにシヨボくしてゐるのだ。そんな時火鉢の側に猫でもるやうものなら、坊やは自分では眠くはない眠くはないと言ひながらも譯の分らないムシヤクシヤ紛れにその猫を叩きつけたり虐めたりする。するとお母さんは心得たもので、「おゝさうだ〜坊やは眠くなんかありやしないわね、この猫がいけないんだよ、サアもう一つ叩いておやり……」そこで猫こそいゝ災難で散々叩かれたり虐めたりされる。然し坊やはそれによつて心機一轉してグス〜いひながらもとう〜寝かされてしまふのだ。この場合坊やの意識としては眠くないといふのが眞實であるのだ。然しお母さんの目から見れば坊やの眠いことは分り切つてゐる事實なのだ。即ちこれが意識以外の、その人自身では氣のつかないところの事實であり眞實であるのだ。世間のことにこれと似たことが澤山あることを吾々は知つてゐる。例へばよく獨身主義を主張したりする娘さんがあるが、女ばかりではなく男の人でも同じことで自分は一生涯結婚なんかしないと超人振つたことをいふ人がある。然しよく〜その實際を調べて見ると、さういふ人達の多くは嫁に行かうにも貰つて呉れ手のなさうな婦人か、それが男である

ならば何處に行つても月給の百圓とは取れさうもない男子かである場合が多いのだ。それから又、お嫁に行かない、結婚しないといひ張つてゐるやうな女や男の方が、却つて他のものよりも早く丸髻姿になつたり、愛妻主義家になつたりすることも往々見受ける世態の實相なのである。

以上の如き次第で本人自身の主張、本人自身の意識が殆んど本當の眞實とは相違してゐるのと同じやうに、××時代の社會思想、社會意識もその眞相を表示してゐるものではないのである。愛國も國富も人道も正義も。或は自由も平等も皆アテにならない場合が多いのである。本當に事實の眞相を知らんがためには、是非とも經濟上、物質上の事情とその現はれた現實とに依つて研究し批判して行かなければならないのである。即ち生産力と生産關係との矛盾を洞察し看破しなければならぬのである。

一六 歴史前紀の終結する時

マルクスはいふ、

「ある社會形態はその内部に包容せる總ての生産力が充分した後でなければ、決して亡びるも

歴史前紀の終結する時

としてゐるのであるが、固よりこの學説も亦彼の諸學説の立脚點となつてゐるとこの唯物論から發してゐる關係上、上來述べ來つたところと多少の重複あることを前以つてお断りしておく。尙ほ又彼の論旨の堂奥を究めるに従つて次第にその記述も論理的となり學究的となつて行つて、そこに幾分諸君の「頭」が必要となつて來るであらうことをも豫め覺悟してゐてもらひたい。稚拙ながらも最善のベストを盡して専ら簡潔平明を旨として論述して行く考へではあるが……。

諸君は本章迄の記述に依つて全社會が如何に物質的生産力——それを以つて自然に對する闘争が行はれるところの——に依存してゐるかを諒知されたことであらう。如何なる時でも生産力に變化があるとそれに従つて必ず環境が變形されて、吾々人間の心は新しい印象を受け新しい確信を表現するやうになつて來るのである。「心理的過程は全く新しい條件に對して反應し、そして必然的に新しい思考の方法と方向——即ち新しい思想、概念、信仰及び意見、そして變化した意識と異つた意志が社會に生じて來るのである。これらの新しい感情と思想とは結局舊い習慣的形式と、社會の規範に對する不満と反抗の精神を招來するものである。そして再整理のための運動が急激にその勢力を増大するのだ。

——新しい環境の條件と印象とに依つて影響されたものが多ければ多いほど、そしてこれらの印象が新しい確信の形成を助けることが早ければ早いほど、それだけ早く社會意識が發生して來るのである。一度びこの社會意識が自覺されたならば、舊い精神的確信や政治的思想及び因襲的な道德的規範が現實的實踐に於いてその支持を持ち、そして現實の事實及び行動の骨組みに依つて維持されてゐたところの時代は最早や過去の夢となつてしまふのである。舊い生活條件を基礎とし、その生産力に調和し相應してゐたところの舊い社會的規範及び制度は消滅してしまつて、生産力を支配する新しい條件に順應したところの新しい社會制度及び規範が消滅したものに取つて代るのだ。即ち一時たりとも止まるところを知らない人類社會の進化は、かくしてその急速なる進歩の他の段階へと進轉して行くのである。歴史の車輪が廻るのである。何故かならば、その運轉手——生産力——が抵抗することの出來ない前進の動力をそれに與へたからだ。しかし成る程歴史の車輪がまだ完全に一廻轉しない前に、即ちその舊位に復さない前に、その道は無數の障礙に依つて妨げられるではあらう。——それはそれを制止する力と、それを前進させる力との間

××××、××××××××××××××××××××××××。古い習慣や制度及び基準といふやうな一切のものは、新しい生産力の要求に應じて形作られた新しい制度や基準に依つて排除されてしまふのだ。生活が吾々の社會に對して新しい歴史的形態を與へるのである。

そこで若しも社會が眞に一つの同質的組織體であり、そしてその個々の機關及び成員がすべて相互に平和と調和の状態に於いて生活してゐるとすれば、成る程吾々は一般的な社會進化を考へることが出来るであらう。だが若し吾々が社會そのものゝ内部的條件を研究してみるならば、吾々は生産力が同時に一切の社會に作用しないこと、却つてその反對にそれが社會と相矛盾した利益を持ち、相互に鬭争してゐるところの幾つかの群團に分けること、それが社會の成員間の統一と調和を破壊すること、それが一の環境くわんきやうではなくて様々の環境を、即ち一樣な感情の共通きやうつうではなくて相對立する確信、意見及び利益の相違を割り出すものであることを知るのである。そこにはたゞ自然と社會との間の鬭争だけではなくて、又社會そのものゝ内部に於ける社會秩序しゃくじつじよの、諸階級間の鬭争が存在してゐるのである。

——「人間と人間との間の關係を支配する條件は、生産方法によつて決定される」。

とマルクスはいつてゐる。そして彼は更に續けていふ、

「後者が變化する時は、また生産者相互間の關係の變化が生ずる。彼等の共同的勞働の條件、並びに全生産行程に於ける彼等の役割は變化する。新しい武器、新しい戦争の道具が発見せられた時、そこには必然的な結果として軍隊の全内部組織、並びに軍隊を構成してゐるところのそして彼によつて軍隊が一箇の組織的完體として考へられるところの、××××××××××××××××××××××××、××××××××××××××××××××××××。人間の社會的關係と生産を支配するところの關係とは、共に物質的生產力に於いて起るところの變化及び發展と一致するのである。古代ローマ社會に存在した關係は例へば奴隸制度どれいせいどの上に基もといてゐたのであつた。その後の封建制度に於いて、それは他の形態を採つた。そしてブルジョア社會は同様にして封建制度のそれと別の條件によつて特性づけられてゐるのである。」

全社會の階級的分裂、即ちマルクスの所謂「人間と人間との間の關係の變化」の原因は、かくてこれらの生産力そのものゝ内に存在してゐるのである。原始時代に於いては殆んど全く狩獵の生業から成り立つてゐたところの當時の生産力は、個人間の關係が絶對的平等の基礎の上に立

つとところの共産主義的社會秩序を無條件的に要求してゐたものであつた。ところがその後、人間の狩獵時代が農業及び牧畜時代に移つた時、社會關係は全く異つた形態を採つたのである。以前の平等的基礎、即ち絶對的共同と生産物の平等分配は今や破壊されたのである。——社會の成員相互間の關係は最早、一等の權利を有する個人の間にならぬが如くではなく、特權あるものと特權無きもの、恵まれたる個人と普通の民衆との間の區別を包持した不平等の基礎にその位置をかたのである。主たる生業、従つて生産力が戦争から成るところの時代に至ると、個人的關係はいよ／＼不平等になつて來て社會は二つの部分——主人と奴隸——とに分裂したのである。今日の資本家と労働者への社會の分裂も亦同様に個々の生産者の使用のためではなく、販賣と交換のために商品を作り出すところの生産力の性質に依つて生じたものである。生産力は既に指摘した通り、たゞ一つの一様な環境ではなく幾つかの異つた環境——それが異つた生活様式を生み出すところの——を割り出すのだ。

一八 相闘ふ二つの階級

右の如き異つた環境から受けるところの印象は、當然しば／＼相互に相矛盾し、そして主體の心意に彼が屬するところの階級によつておの／＼異つた影響を與へるのである。その結果は同一社會内に異つた思想、確信、習慣、制度——一言にしていふならば異つた觀念體が形成されるのである。かゝる状態の下に於いては、一の全社會に對する一般的倫理法則といふものはあり得ないけれども、その代りそこには階級道德といふものが展開されることになるのである。被抑壓階級の倫理的規範は、しば／＼抑壓階級によつて支持されるところのそれとは全然正反對である。被支配階級が正當と考へるものは、しば／＼支配階級によつて邪惡と考へられるかも知れないし、ブルジョア階級が義務と見るところのものをも吾々プロレタリアートは罪惡と見るかも知れない、否かつても明記した通り現今の社會に在つては善惡に二様の種類が存在してゐるのだ。ブルジョア階級とプロレタリアートの兩階級が對立し相戦つてゐるそれと同じやうに。そしてこれら二様の善惡はおの／＼それ自身の見地から是認せられてゐるのである。何故ならば、彼等はそれの印象をそれ／＼異つた源泉から攝受してゐるからである。彼等は全く異つた環境の内に生き、それから呼吸し、そして彼等の思想は全く相異つた方向に指し向けられてゐるからである。即ち

の、激烈必死な階級戦が生起せずにはおかないのである。人類が種々な階級に分裂し、そして階級意識を把握してからこの方、現存秩序の下に於いて有利であるものとそれに苦められるもの、支配者と被支配者、搾取するものと搾取されるものとの間の、この階級闘争は歴史の全行程を通じていろ／＼な形式の中に現はれてゐるのである。この社会的階級闘争において、優勝階級は常にその當時の生産力に對して、彼等の有する原則及び要求が最もよく適應してゐるところの階級なのである。生産力を、従つて経済的權力を自己の味方とするところの階級は、遅かれ早かれ政治的權力の支配をも亦獲得することが出来るのであつて、それはこの權力を以つて自己の階級的動機に基いた、そして新しい生産力の利益に於ける社会的整理を爲し遂げるのである。

フランス大革命及び一八四八年の革命が勃發されたのは、中世の全社會構成——その最も重要な要素である封建制度と共に——を支配してゐたところの生産が、その時代に至つて新しい形態に發展したためであつて、それは舊い社會制度を支持することが出来なくて、遂にそれを搖がし没落するまでに、粉碎したのである。新しい生産力の最も強い表現を與へたところ階級は、 $XXXXXX$ であつたのである。新しい生産力が充分に發展してその代表者たる XX

X が一箇の階級として、社會の支配者群となるべき充分な経済的・最高權を獲得した時、初めて時代後れとなつた封建制度は廢止されてそして、今日の $XXXXX$ によつて代位されたのである。舊い法律及び制度は、資本の要求に應じて變化され或は全く消滅し、生産力の發展によつて経済的勢力を得たところのブルジョアジーは、歴史的必然の法則に一致して今や $XXXXXX$ をも獲得したのである。

あらゆる XX 、 $XXXXXX$ は、 $XXXXX$ が全部的或は部分的に新しい從來は被支配階級であつた社會群の手中に移ることを意味してゐる。史的唯物論は XX 權力がたゞ生産力の利益を代表するところの階級にのみ移り得ることを示してゐるものである。如何なる社會制度が、歴史的必然の法則によつて現在の秩序にとつて代るであらうか？ そして現代の一大階級戦の結果はどうなるであらうか？ いづれの階級が勝利者たることを得るであらうか？ 吾々は今や如何に歴史の客觀的法則が $XXXXXX$ とプロレタリアートの XX に導かねばならぬことの避くべからざるかを見ることとしよう。

の以前の生産力の結果なのである。

社会それ自身を維持するための闘争において用ゆる物質的手段が個人的であり、小規模産業から成り、そして全く個人的努力と労働要具の個人的所有を基礎としてゐた時には、分配も亦必然的に個人的であつた。即ち個人的占有は論理的であるのだ。何故なら、所有は労働に根ざしてゐたからである。——私有財産は當時歴史的必然であつたのである。小規模産業に於いては、生産物は單なる労働の創造物ではなかつたのだ。それは要具と個々の労働者の熟練との結果であり、その上に彼の努力と技術との特色を帯びてゐたのである。小規模産業に於いて具現された生産力が私有財産を生じ、そして必然に富の手段の個人的所有と分配とをもたらしたのである。

ところが生産力は産業××によつて變化して來た。即ち今迄の小規模産業は徐々に大規模産業に進化したのである。大規模産業、或は大量生産はその發展のために、吾々が既に指摘した如く集合的若しくは社会主義的分配方法を要求してゐるのである。今日の生産力が現存社会制度（私有財産と生産の結果の個人的分配を基礎としてゐるところの制度）に依つて、その發展を拘束され阻碍されるといふことは、恐慌の發生によつて全く明白に示されてゐるのである。この恐慌は

悪い産業組織の結果であり、社会化された生産と個人的占有との間に必然的に醸成されるところの矛盾の表現に外ならないのである。

××家的管理から結果するところの無組織的生産において、各生産者はその競争者を押し潰し、より多くの財政的権力を獲得することに依つて勝利を得ようと専心する。その結果として生産の混乱と無秩序とが生じて來るのである。多くの産業部門に於いては、その生産の増加と歩調を合せることの出來ない大衆の購買力に因る過剰生産が生じてゐるのに、他の産業部門は殆んど全く無視されてゐるのだ。かうした状態が度重なり甚だしくなつて來るとやがて恐慌を生じ、その結果として生産力が非常に制縛されることとなるのである。即ち最近に於ける××××××××、産業の合理化及び失業と貧困の激成がそれであるのだ。かくて生産の無組織は、余剰生産——生産力そのものに對して不幸なる反作用を有するところの痼疾を生ずるのである。恐慌は全く近代社会が悩んでゐる病の一の症状たるに過ぎないのだ。そしてそれは生産力が現在の制度とその習慣、法律、施設などいふやうなものに堪へ得ないといふことを示してゐるものに外ならないのだ。即ちマルクスはこの間の消息を喝破してついでゐる——「制度はそれ自身の肥滿によつて窒

せしめられてゐるのだと教へた者なのだ。」

かやうな非難は全く根據のないものである。マルクスよりも人間の智力の重要性を大きく認め
たものは曾つてなかつたのだ。そして又マルクスよりも人類の意志の影響、その精神的過程及び
欲望の影響を多く評價したものは曾つてなかつたのだ。

マルクスは歴史的事件を、起るかも或は起らぬかも知れぬやうな、そしてそれに對して人類は
何等の支配力も影響をも持たぬやうな、單なる偶然的な出來事としては考へなかつたのだ。彼は
歴史の事件を人間の欲望と意志との結果と見たのである。この學說によれば人類がその運命を指
導し、決定し得ることは明白な實とされてゐるのである。歴史は社會に行はれてゐるところの或
る法則に従つて進んでゐる。マルクスの功績は彼がこれらの歴史を支配する法則を發見した點に
存してゐるのである。

吾々の既に知り得たやうに、生産力は人間の認識及び知覺なしにはそれに相應した社會形態を
成就することの出來ないものである。何故かなら、社會意識の——従つて社會の個々の成員の意
識の參與なくしては、如何なる社會的變革も起り得ないからである。生産力はたゞそれが正しく

生産力の利益に適合するところの感情及び確信を人間に與へるが如き、ある種の環境を創り出す
が故にのみ勝利を獲得することが出来るのである。あらゆる改革は實現されうる前に、先づ人間
の心意によつて認識され理解されなければならないのだ。そして意識は生産力とその利益を適當
に表現しなければならぬところの、社會形態との間の媒介であらねばならないのである。意識並
びに意志は、恰もこれら兩者が支配的生產力の結果であるやうに、新しい秩序の原因でなければ
ならないのだ。意識は環境と社會生活ととして一切の改革との間の連環である。吾々が或る何等
かの形態若しくは制度が歴史的に必然であるといふ時、吾々は必然性が人間の意志や人間の意識
の行使なしにそれを實現することが出来る、などいふことを意味してはゐないのである。むしろ
吾々は歴史的必然に従つて、意識が必ず正にある一つの方向に向けられ、人間は必ず正に生産
力に適合し調和するところのある秩序を欲し、要求するのであらうといふことを意味してゐるの
である。

人間の心意が尙ほ過去の、古びた環境の印象に満たされてゐる時は、その意識及び意志も亦反
動的であり抑制的であり無能力である。××及び××は新しい印象の感受のために心意を×××

の客観的法則がよりよく成就されるやうに、そして××××の秩序の實現が促進されるやうに、障害を除去し、道を開拓することに在るのだ。

さて、十九世紀の初めにロバート・オーエン、サン・シモン、及びシャルル・フーリエといふやうな教養のある思想家達を、その高尚な人道的良心に訴へることによつて惹きつけてゐたところの××××理想は、どこかに現實から切り離されたところがあつた。即ち現實的事實の基礎を缺いてゐたのだ。といふのは何人もその實現の方法、或は可能性を知ることが出来なかつたからである。當時の社會主義は證明することの出来ないものであつたのだ。それはたゞ信仰の中のみ得られるものだつた。人間の究極的完成を信じ、そして一千太平年の可能。虚偽々善その他の人間の弱點が永遠の眞理に依つて打ち勝たれ根絶される救世時代、闘争と不和が永遠の平和に、憎悪が愛に、分裂が統一に道を譲るところの社會の可能を信する人々、——これらの崇高なる理想の見解を持つところの人々は、容易に現存秩序が××××の秩序に變化するだらうといふことを信することが出来たのである。

しかし右の如き立場からは、政治的煽動及び眞の社會的行動は不可能事であつたのだ。何故か

といへば、空想的社會主義は理論の問題ではなくして、感情の問題であつたからである。——それは心情を動かすことは出来たけれども、理智を動かすことは出来なかつたのである。地上の社會には悪事と無恥と不正とがまだ盛んに行はれてゐるのに、××××的理想は天國に高く祭り上げられてしまつてゐたのだ。空想のユートピアでは社會的正義がいよ／＼輝やかしく光り渡つてゐる時に、現實の生活では人間は解放の微光すらも望み見ることなく、慘憺たる××××の下に虐けられ搾取されてゐたのである。恰もその他の一切の未來に熱中して現在を忘れてゐる夢想的ユートピアや氣まぐれの思想が、若し存在すべきであるならば多かれ少なかれ普及しなければならぬと同様に、××××的理想も亦その以前の信奉者の多くを放棄するに至るやうな、日常の話題と通俗の形態を採らなければならなかつたので、遂に目先の見えぬ空想家や夢想家のみしか引きつけることの出来ない新しい一種の宗教的偶像に轉化してしまつたのである。古い時代遅れの信仰の廢墟が今や「平等」や「新世界」といふやうな名の下に新しい支柱を以つて支へられたのである。即ちサン・シモンの弟子達によつて崇高な社會主義的理想は、實際以上の如く曲解を加へられたのである。

る彼の著は彼がむしろ後者の見解に傾いてゐることを示してゐるやうに見受けられる。即ちスミスはいつてゐる。

——「何等かの商品の価値はそれを所有しても、自らそれを使用或は消費せずして、それを他の商品と交換せんとする人にとつては、それが彼をして購買若しくは支配せしめ得るところの労働の量に等しい」と。

彼の言葉に従へば、あらゆるものがそれを獲得したところの、そしてそれを賣り或は他の何等かのものと交換せんと欲するところの人に取つて眞實に値するものは、それが彼自身から免除し、そして他の人々に強制することの出来るところの勞苦及び困難である。——元來世界の一切の富は金に依つてでも銀に依つてでもなくて、實に労働に依つて買はれたものなのである。そしてその価値はそれを所有し。そして新しい生産物と交換せんと欲する人々に取つて、それが彼等をして買入れ得せしめることの出来る労働の量と嚴密に等しいのである、といふことになる。

そこでスミスに取つては、価値がそれによつて決定されるところの労働の量は、純粹に主觀的性質を帯びてゐることが認められる。彼の學説が考へるのは生産物の生産に與へられたところの

労働ではなくして、既に出来上つた生産物がその所有者をして彼自身の労働を節約し、そして他人の労働を支配し若しくは購買せめるところの量であることになるのである。彼は価値といふものに對して或る客觀的着色を施さうと試みてゐるけれども、然し彼が価値は特定の生産物がその持主から免除するところの労働の量に従つて評價されるものであると主張する時、彼は価値の決定的要因を明かに主觀的なものたらしめてゐるのである。ある生産物の価値が他のそれよりも大きいか小さいかは、前者の支配し或は購買し得る労働の量が、後者のそれよりも多いか或は少ないかに依ると彼は主張してゐるのである。

さて、今一人の有名な經濟學者ダヴィッド・リカアトは、スミスの右學説の缺點を發見して次のやうな一層明確な原則を發表したのであつた。即ち——「すべて或る商品の交換価値は、その商品の生産に費された労働の量に依つて決定されるものであつて、その持主がそれによつて免除され得る労働の量によつて決定されるものではない。」といふことこれである。ある生産物が他の生産物と交換され得るといふ事實は、兩者の生産に於いて費される労働が全く或は殆んど一致してゐるといふことを意味してゐるのである。

リカアアはその學説をザット次のやうに説明してゐるのである。例へば——その貨物の生産に百時間の労働を要する一着の上着が、五十時間の労働によつて作られ得る一足の靴と交換さるべきであるならば、洋服屋の労働の價值は靴屋の労働の價值の丁度半分であるといふことになる。そこで洋服屋は明かにその生活を維持するためには靴屋の二倍だけ働かなければならないことになる。この差異として、すべての者にその職業の自由選擇を許してゐるところの社會に吾々が生存してゐる以上は、あらゆる洋服屋はその子供に靴屋の職業を教へたくなるであらう。そして結局吾々の社會には非常に多くの靴屋とそして甚だ少ない洋服屋としかがないうやうな時が來ることであらう。かやうな不均衡な状態は忽ち洋服仕立業の重要性を増すと同時に、餘りに多過ぎる靴屋の仕事の價值が急激に下落するといふ結果を招來することになる。そして萬人にその職業の勝手な選擇を許すところのこの労働の自由競争は、必然且つ自然に、あらゆる他の條件にして同じであるならば、或る職業に於ける一定量の労働は、別の職業に於ける同等量の労働と同じ價值を持つといふ法則を生ずるに至るのである。そしてこの故にこそ、普通各種職業に充分の數の労働者が従事してゐるのであり、さまざまの産業部門に比較的均衡な状態が存在してゐるのである。

一三三 スミスとリカアアの労働價值説 (二)

さて、スミスとリカアアとの前章の如き労働價值説の證明に於いての、兩者の間の根本的相異は明白である。即ちスミスに於いては客觀的な價值法則を主觀的心理的に證明してゐるのであつて、彼はその學説の基礎を人間が彼等にとつて得ることの困難なものを高く評價し、彼等が容易に得ることの出來るものを低く評價するところの心理的傾向の上に置いてゐるのである。これに反してリカアアはその學説を客觀的に證明してゐるものであつて、等量の労働が等しい價值を持たねばならぬのは、吾々の社會の客觀的條件に依るのである。即ち、それは自由競争の法則のためであつて、一人々々の個人の感情や思想のためではないといつてゐるのである。

リカアアは價值を決定するところの條件が、偶然的主觀的不定的なものではなくて、全く客觀的永續的恒久的なものであること、そしてそれが吾々の社會組織そのものゝ根柢、即ち自由競争の中に横はつてゐるものであつて、吾々の「自我」の中に存するものではないことを指摘した最初の經濟學者であつたのだ。

あらゆる商品はその価値に應じて拂はれてゐるであらうか？ 否！

一の商品の価値は、必ずしも吾々はその商品を賣つたり、或は交換する時受け取るところのものと同一ものではないのである。即ち、価値は価格と同一ではないのだ。

一の商品の価格とはそれに對して現實に支拂はれるところ貨物、或は吾々の今日の社會では貨幣の量なのである。そして価値は生産に於いて決定されるが価格は市場に於いて決定される。若しも吾々の社會が如何なる種類の生産物も一般的必要に對して丁度充分な量だけ生産され、そしてそれ以上少しも生産されないやうに組織されてゐるとすれば、その時は価値と価格との間に何等の差異も存在せずして、それらは常に同等であり得るであらう。その場合、ある種類の十時間の労働は現實に他の種類の十時間の労働と相交換され得るであらう。ところが吾々の現經濟生活は無組織である。生産は出たら目であり、資本家階級の勝手氣まゝである。その結果多くの生産物についてしばしば生産過剰が起り、又その反對の生産不足がしばしばあるのである。

第一の場合に於いては供給(販賣者間の競争)がより多く、そして需要(購買者間の競争)がより少ないことである。そして生産過剰の結果は生産物の価格が下落し、その標準価値以下で賣られるといふことになるのである。

第二の場合に於いては全く前者と正反對の結果を起す。生産不足がある時、需要が供給よりも多くなり従つてその生産物が標準価値以上の価格を以つて賣られるのである。そこで価格は決して価値と精密に同じものとはなり得ないのである、何故なら、価格は市場の状態によつて決定され、物資の供給とそれに對する需要との間の均衡によつて支配されるものであるからである。

ジョン・スチュワート・ミルは以上の如き価格の価値に對する關係を、實に簡明且つ平易な例證に依つて比較してゐる。即ち自然の水平線に對する海の波の關係であつて、しばしば波は水平線よりも高くより、そして又しばしばそれよりも低く沈む、といふことこれである。いふ迄もなく水平線は標準価値を示し、波は価格を意味してゐるものに外ならない。次に、吾々は一つの例によつてこの原理を検討して見ることにしよう。

假りに今一圓の中には一時間の労働が含まれてゐるものとする。若し筆者がその製造に十時間の労働を要したところの一つの商品、例へば一足の靴を持つてゐるものとするれば、従つて筆者の所有する靴の価値は十圓であるだらう。ところが靴を作つたところの人が、恐らく靴の商況に充

分通じてゐなかつたので彼は實際に要求されてゐたよりも多くの靴を賣出したのであつた。そして彼と他の製造者との間に競争が起り、その結果として靴製造者達はその製品の價格下げなければならぬやうになつた。彼等は筆者に十時間の労働を含んでゐるところの靴を九圓に、即ちその眞の價值よりも一圓安く賣らなければならなかつた。

ところで、この結果はどうなるべきであらうか？ 靴製造者が靴のその價值以下に賣られてゐることを知つたとき、彼等は當然その生産高を減少するであらう。即ち靴の需要が供給を超過するに至るであらう。今や商人の間にはなく、購買者の間、消費者の間に競争が起ることになつて來るのである。そしてその結果は又當然に靴の價格が騰貴するに至るのである。筆者は一足の靴に對して十圓（その眞の價值）ではなくして、それよりも幾分多く、即ち十一圓（それは標準價值を一圓だけ超過してゐる。）を支拂はなければならなくなるであらう。

以上の如く靴の價格は需要と供給の關係に依つて様々であり得るのである。ある時はその標準價值よりも低く、又他のある時にはそれよりも高いことがあるかも知れないのである。けれども、若し吾々が異つた多くの靴の價格を加へて、この總計を異つた多くの靴の價值の合計と比較

するならば、吾々は價值の總計が價格の總計と等しいといふことを發見出來るのである。かくて前記の吾々の引例に於いて、二つの異つた場合に於ける靴の價格の合計は二十圓（九圓プラス十一圓）となり、又その價值の合計も二十圓（十圓プラス十圓）となることが分るのである。

リカアアの學說に依れば若しすべての人が如何なる職業でも彼の欲するものを選び自由を有つてゐないならば、例へば若し洋服屋がその子供に靴屋の職業を教へることが、法律に依つて一の職業から他の職業へ轉ずることを禁じてあるために（産業がギルドに組織されてゐた中世の状態は實際そうであつたのである。）か、或は靴作りが普通のものは持つてゐないやうな特別の技能を要するために妨げられてゐるならば、生産に要した労働によつて價值が決定されるといふ原則は應用され得ないのである。リカアアの學說に従へばその場合に於いては、靴作りの労働は洋服仕立の労働よりも高い價值を持ち、その結果靴作りが誰でも自由に従事することの出來る職業でなく、自由競争の法則の作用から除外されるものであるから、その價格は自由競争に依つて調節されることはあり得ないこととなるのである。

かくてリカアアの學說はある種の稀有品、例へば大家の書畫の價值及び價格がそれに含まれて

あるところの労働の量によつて決定されないことは、さうした稀有品が自由競争の下には置かれ
ないからであるといふ事實をよく説明してゐる。独占の下におかれてゐる物貨も亦これと同様の
結果を生ずるのである。それら独占されたものゝ価値及び価格はその生産の労働によつて調節さ
れないのである。それらの生産物は自由競争の分野からは締め出されてゐるからである。

ところで、吾々の生存してゐる今日の社會に於いては、疑ひもなくこの自由競争によつて少し
も影響されてゐないところの多くの種類の商品が横行してゐるのである。そしてそれ故に、リカ
アドに依ればそれらの商品は他のあらゆる商品の価値を決定するところの標準に依つて評價する
ことは出来得ないのである。

然らばかゝる商品の価値及び価格は如何にして決定されるのであるか？ 吾々は既に藝術上の
名作^{名作}独占の下にある貨物、學者の發見等がその生産に於ける労働によつて評價されないことを知
つてゐる。しかしさうしたものゝ価値は現實に於いて如何にして決定されてゐるであらうか？
如何なる標準によつて吾々はそれらの価値及び価格を測定するのであらうか？ 誰によつて或は
如何なる條件によつてそれらの価値及び価格は決定されるのであらうか？——リカアドの學說も

これらの質問に對しては少しも答へるところがないのである。そしてこれらの問題に對する解答
を吾々に與へてくれたその人こそは、實にかの秀^秀でたる吾等が學者カール・マルクスその人であ
つたのだ。マルクスこそは労働價值論を極めて明確に發展させた人であり、その貢獻^{貢献}によつてこ
の學說が人類思想の進歩に於ける最も重要な一要因としての、その正當な地位にまで引き上げら
れたのである。以下吾々はその教ふるところに従つて學ぶべきところを學び、知るべきところを
知り、而してその行ふべきところをして大に行なはなければならぬ。

二四 貨幣なき交換制度

マルクスは物貨の価値がその生産に於いて與へられたところの、労働の量に依つて決定される
ものであるといふことについてはリカアドと一致してゐる。しかしマルクスはリカアドに依つて
提出されたのは全く異つた労働價值論の證明を提出ばかりではなく、又彼によつて初めて全問
題が明瞭^{明瞭}に示され、吾々は彼の學說を以つてさまざま市場現象のすべてを説明することが出来

貨幣なき交換制度

るやうになつたのである。——マルクスは彼の學説を説明するために、貨幣が物貨交換の媒介ではないところの社會制度を例に引いてゐる。即ち、その社會秩序の下に於いては物貨は貨幣の如き媒介を用ゐることなしに、直接相互に交易されるものなのである。

彼は説明していふ。

「——例へば一人の織物屋が彼自身の使用のために必要としないところの二十ヤードのリンネルを織つた。一人の洋服屋も亦同様に自分が直接使はないところの一着の上衣を仕立てた。この織物屋と洋服屋とが出會つた時、彼等はその生産物を相互に交換することに同意する。何故ならば、一般に行はれてゐる意見に従つて、二十ヤードのリンネルの費用と一着の上衣の費用は等しいものと考へられるからである。織物屋は尙ほ致々として彼の職業をつゞける。彼は更にもつとリンネルを生産して、それを家具やその他の彼の必要とする多くの物品と交換するのである。彼は二十ヤードのリンネルを例へば一脚のベッドと交易するとする。尙ほ二十ヤードを一脚のテーブルと、他の二十ヤードを一ヶ月間の住居に、更にもう二十ヤードを四十斤のパンに換へる、等々。これらの織物屋が關與した交換に於いて、その交易された商品の價值は各

々相等しいのである。二十ヤードのリンネルは一着の上衣、一脚のベッド、一脚のテーブル、一ヶ月間の住居、四十斤のパンと同一の價值を持つてゐるのである。」

以上の如きマルクスの説明を表式とするならば、吾々は次のやうな目録を作ることが出来るであらう。

- | | |
|------------|---------------|
| リンネル二十ヤードは | 一着の上衣に等しい |
| 同 二十ヤードは | 一脚のベッドに等しい |
| 同 二十ヤードは | 一ヶ月間の住居一戸に等しい |
| 同二十ヤードは | 四十斤のパンに等しい |

上表の商品はさまざまの用途のために必要なものである。——それらは同じ必要を満たすのではなくて、いろいろの種類の必要を満たすものである。パンは飢ゑを満たし、リンネル及び上衣は衣服に用ゐられ、ベッド及びテーブルは家具としての用を満たすのだ。そしてこれらの各商品はさまざまの目的のために利用される。これらの商品はそれ／＼異つた使用價值を持つてゐるのである。種々の品目の使用價值は、恰もそれが作られてゐる材料の異なるが如くさまざまであるの

だ。リンネルは糸を以つて織られ、テーブルは木で作られ、住居は石材、木材、鐵材等々を以つて建てられてゐるが如くである。

このさまざまの商品の使用價値の不同性こそは、商業及び交換にそれらを導くところのものである。若しも使用價値がすべて同一であつたならば、經濟的貨物の相互交換は不可能なことゝなるであらう。何故ならば、何人もリンネルとリンネル、ベッドとベッド、パンとパン等の如き無意義な交易を欲するものは恐らくないであらうからである。商品が本來不同であり、それらが各々異つた必要を満たし、従つてそれ〴〵異つた使用價値を持つてゐる時にのみ、初めて或る商品と他の商品とを交換することが出来るのである。

ところで、諸君はこの場合次のやうな疑問に逢着しはしなかつたらうか。即ち、交換される商品が本來相異しなければならぬ以上、それでは如何にしてそれらは相互に實際等價物であり得るのか？ といふことである。例へば前記目錄の場合に於いて、吾々は二十ヤードのリンネルを一着の上衣と等しいものとして認めてゐる。誰しも少なくとも數學の初步に通じてゐるものは、たと等しい性質を持つものゝみか等しくあり得るといふことを知つてゐる。或る數字が家具と等し

く、或る家具が或る衣服と等しいなどといふことは馬鹿けたことのやうに思はれる。吾々が二十ヤードのリンネルは一着の上衣に等しいといふ時、これらの商品は明かに何等かの共通の性質、何等かの平等の基礎を持つてゐなければならぬ筈である。何故なら、若しさうでなかつたらそれらは等價物として見ることは出来ないからである。この共通の性質、さまざまの商品が持つところの、この根本的の同様性とは何であるか？ 吾々は種々な商品の共通の性質が、その効用或はその自然的形狀、或はその使用價値の中に存するといふことは出来ないものである。何故ならば、各種の商品の効用性は必然に異つてゐるからである。そして吾々が効用を標準と認めない以上、吾々は商品がその社會的方面——それが包含するところの労働の量——以外の普遍的性質、或は同種の一般的基礎を決して持つてはゐないといふことを認めなければならぬ。商品の交換價値を決定するところの極めて重要な、そして唯一の標準は人間の勞役、即ち勞働力であるのだ。

前記の職人達はすべてその商品の生産に勞役したのである。洋服屋並びに織物屋はその技術及び生産物を作り出すために精力を費したのである。勞働力、即ち各個の商品の生産の中に含まれてゐる人間の精力は、經濟的貨物と呼ぶことの出来る、一切の商品の共通の性質であるのだ。そして

この共通の性質の故にこそ、種々の商品が同じ類型しゆいに屬し相互に交換されることが可能なのである。

織布に費される労働の性質は、勿論上衣を縫ひ或は家屋を建てる労働の性質とは全く異つてはゐる。異つた種類の商品の生産は異つた筋肉しんじくと異つた神経しんけいの使用を要求するものである。例へば洋服屋は主として彼の手を使い、織物屋はより多くその足を使ふ。そして又教師などはその頭腦とその心とを使ふのである。交換に於いては、へしかながら労働に用ひられた特定の筋肉しんじく或は神経しんけいを無視して、一般に労働力、人間の精力が考慮せられるのである。吾々が二十ヤードのリネルは一着の上衣と等しいといふ時には、吾々は二十ヤードのリネルが一着の上衣に含まれてゐると同量の一般的労働力を含んでゐるといふことを意味してゐるのである。

二五 マルクスに於ける評價の標準

吾々は今や労働價值論に關するリカアドとマルクスの所説の間の重要な相異を明白に知ることが出来る。リカアドの説明が只自由競争の状態の下に生産され得るところの物貨ぶつがのみを包含して

ゐるのに對し、マルクスの説明は一切の物貨——ある種の獨占の下に在るものや、或は非常に稀有ひやくのものさへも包含してゐるのである。マルクスは或る生産物が他の生産物と交換されてゐる事實は、生産物がその包含するところの労働の量によつて評價されるといふことを示してゐると教へるのである。物貨の交換若しくは商品の交易を含むあらゆる取引は、生産物の比較である。そしてたゞ共通なる何物かを持つところのものゝみと比較され得るのである。この共通の性質とは労働力以外の何ものでもないのである。

各商品に含まるゝ労働の量は、費されたる時間——即ちその物質の生産が普通、且つ正當に要すべき労働の時間數、或は日數に依つて計量されるのである。二十ヤードのリネルが一着の上衣と交換されるのは、二十ヤードのリネルの生産に費される労働は、一着の上衣を生産する労働と同じ長さを要すべきだからである。

吾々が特に要すべきといふのは、個々の労働者の場合に於いて或る生産物の生産に費される實際の時間をこゝに問題としてゐるのではないからである。若しも二十ヤードのリネルを織るのに尋常の能力を持つ普通の労働者が十時間を要すべきであり、そして、一着の上衣を縫ふのにも亦

十時間を要すべきであるならば、その場合二十ヤードのリンネルと出来上つた一着の上衣とは等しい価値を持つてゐるのである。

例へば若し織物屋がたま／＼その職業に非常に熟練した労働者であつて、二十ヤードのリンネルを五時間に織るとすれば、事實リンネルは僅か五時間の労働を含み、上衣は十時間の労働を含むにも拘らず、彼はやはり交換に於いてはその上衣を受取るであらう。評價の標準は出来上つた商品の生産に普通の労働者が要すべき時間の量であつて、たま／＼普通以上に熟練した特別の労働者が要する時間の量ではないのである。この同じ原則は又正反對の事態に於いても同様に眞實なのである。若しも織物屋が偶然怠け者か或は不熟練の労働者であるとか、又は若しも彼が相當の労働要具を持つてゐなかつたとして、その結果彼は二十ヤードのリンネルを織るのに二十時間を要するにも拘らず、彼はその生産物の代りに二着の上衣を要求することは出来ないのである。何故かなら、彼がその生産に費したところの時間は問題ではなく、普通の技術を有する普通の労働者が通例の労働方法と通常の速度とを以つて普通且つ正當に要すべきところの時間がこゝに考へられてゐるのだからである。

然らば如何なる標準に依つてさうした労働時間は測定されるのであらうか？ 労働時間の測定單位は普通の何等練習を必要としない單純労働から引き出されるのである。豫め準備或は練習を必要とするやうな種類の労働は「熟練労働」と呼ばれて、しば／＼單純労働よりも高く評價されるのである。

例へば老練な一人の機械工がたゞ六時間働いたならば、彼はその労働に對して十八時間或はそれ以上の普通労働に等しい報酬を受けらるであらう。それは機械工が彼の職業を學ぶのに多くの時間を費し、その間彼は少しも稼がなかつたばかりでなく、その準備のために多くの価値を支出し、さへもしたためである。又醫師が一度患者を往診したゞけの勞務に對して、殆んど普通の不熟練労働者の一日中の所得に等しい程の報酬を受取るのも全く以上の理由からなのである。醫師が病氣を治療し得るまでには、彼はその準備に十五六年内外の年月を費さねばならず、その期間中の彼は所得が皆無である。だから彼は既に彼が開業した後、彼の準備期間に對する充分な補償をも亦受けるやうに心掛けねばならない筈である。一時間の醫者の業務の中にはそれ／＼數時間の彼がその職業を習得するために費したところの時間が含まれてゐるのだ。それ故に資格ある醫

師の一時間の仕事は、普通の種類の労働の十時間に等しいものとなるのである。

さて、マルクスの價值論は吾々の經濟生活に於ける多くの現象を明白に説明してゐるものである。——吾々の既に見た如く、マルクスは常に社會的、必要労働といふことを強調してゐる。即ちあるものゝ價值は、個人が實際にその生産に費した労働の量ではなくて、むしろ普通の労働者に依つて通例の産業的條件の下に於いてそのために要せらるべきところの労働時間の平均量であると主張してゐるのである。

以上の如き考案を具體的事情に當^{あて}て、次のやうな場合を吾々は如何に見るであらうか？

——例へば帽子といつたやうな普通のある商品を一人の労働者が生産するとする。そしてその生産に於いて彼は時間と精力との通常量を費したのである。ところが彼の作つたやうな種類の帽子は既に流行後れであつたので最早や人々の好みには適しなかつた。この場合その帽子は通常の價格を得ることが出来るであらうか？

確かにその帽子に依つて通常の價格を得ることは出来ないであらう。何故ならば、生産の條件を考へただけでは充分でなく、吾々は又需要の條件をも考慮に入れなければならないものである

からである。一の生産物が社會的労働に依つて作り出されるといふことだけでは不充分なのである。——労働は必ず欠くべからざるものである。丁度氣の確かな人間は節に水を注ぐ労働に對して、それが何等現實の用をなさぬ以上は何ものをも與へないに違ひないやうに、少しも必要のない生産物に用ゐられた労働に對しても亦、何等の報酬をも與へられないであらう。

更に右について今一つの狀態を考へて見ることにしよう。——或る社會が今一千着の衣服を必要としてゐた。ところが何かの間違ひに依つて百着だけ餘分の衣服が製造されてしまつた。これらの衣服の裁縫には平均労働量が費されたのである。そこでこれらの衣服に對して幾何が拂はれるであらうか？ それらが得るところの價格はきつとその實際の價值よりも十パーセント低いに違ひない。何故ならば、實際に要求された量よりも十パーセントだけを超えた供給過剩が競争の條件を作り出してゐるからである。供給がそのあるべきよりも十パーセントだけ多いのだから貨物が制し得る價格は必然に十パーセント低くならなければならない。これは單に平均労働時間ばかりでなくて、必要及び需要の條件も亦價值の決定に於いて現實に考慮せられてゐるところの要因であるといふことの決定的證據である。所與の或る労働は、その特定労働に對する必要、或は

需要の範圍及び程度に應じて、より多く或はより少ない社會的効用を持つてゐるものである。商品の中に含まれてゐる勞働の社會的効用は、たゞ生産に於いてのみならず、又市場に於いても決定せられるのである。

或る生産物はその生産物の生産に於いて、通例であるところの平均勞働力を以つて製造されるかも知れないが、賣り出される時には、しかしそれはそれが包含するところの勞働時間よりも低く評價されるかも知れない。何故ならば、しばしば實際に起る如く與へられたる時に於いて得られるその種商品の總數に於いては、社會によつて眞に要求されてゐるよりも多くの勞働が費されたといふやうなことがあり得るからである。若しも社會がたゞ一千着だけの衣服を必要としてゐるならば、そして若し現存産業條件により各一着の生産が十時間の社會的勞働を要求してゐるならば、そこで衣服の總數に對して必要な勞働の總量は一萬時間になるであらう。この時間はその種勞働の社會的効用の最大限を示してゐるものである。若しその後、一千一百時間の勞働を含む一千一百着の衣服が生産されるならば——たとへそれが生産の條件に依るものであつても——尙ほそれが賣り出される時、一千一百着の總數は一千一百時間(その生産に費された時間の量)ではな

くして一千時間の勞働に等しい價值しか利することが出来ないであらう。何故ならば、一千時間を包含する一百着の餘剰がその當時社會の要求する量よりも超過してゐるからである。各個の商品の價值はそれ自身獨立のものとしては、全く生産の條件に依つて決定されるが、しかし生産された同種商品の總數の一部分としての或る商品の價值は、市場に於いて決定されるものなのである。あらゆる商品の市場價值は常にその價格である。そして價格とは供給及び需要の條件間の關係の表現であるのだ。

二六 「社會的必要勞働」の價值

さて、以上の全過程は大體次のやうに説明することの出来るものである。——即ち、社會が若干の商品、例へば一千着の衣服を必要としてゐる。そこでその當時の一般的生産條件の下に於いては、この一千着の製造のためには幾何の社會的必要勞働を要するかが(勿論理論的に)算定される。若しも現存産業状態の下に一着の衣服を製造するための社會的必要勞働が十時間を要するならば、社會はその場合一千着の衣服の生産のために一萬時間の社會的勞働を(これも理論的に)

「社會的必要勞働」の價值

「社會的必要勞働」の價值

割當てるのである。この社會的勞働の量はそれ以上も亦それ以下も費すことを許されないのである。若しも丁度一千着の衣服が生産されるならば、各一着の衣服は市場に於いて十時間の價格を得、かくて市場價值と生産價值とは同一たり得るであらう。若しも一千一百着の衣服が生産されたならば、市場に於いては全一千一百着がたゞ一萬時間の勞働——これらの貨物の生産のために割當てられた勞働時間の量——と交換せられたことになるので、各一着の市場價格は殆んど十パーセント下落することになるであらう、若し他方、たゞ九百着の衣服が生産されたとすれば、各一着の市場價值は生産價值よりも十パーセントだけ高くなるであらう。何故ならば、社會的要求に應じて生産された衣服の總量が九百着に過ぎないといふ事實にも拘らず、市場に於いては定められた通り一萬時間が與へられるからである。

そこで吾々はこゝにこの同じ過程がたゞ一つの必要だけでなく、社會的需要によつてその充足が命ぜられるところの種々の必要に作用することを説明しなければならぬ、——例へば、社會がある與へられた時に於いて一萬時間といふ一定量の勞働力を持つてゐるとする。そこには同時に又、靴、衣服、住宅、燃料、食料、教育及び藝術的繪畫の如き贅澤品に對するさまざまの社

會的必要があるのである。そしてその各々の範疇の必要に對して生産條件に従ひ、ある一定量の勞働時間が割り當てられてゐる。社會は一千足の靴を必要としてゐる。各一足の靴に對して平均量六時間の勞働力が與へられねばならない。そこで社會はその所有する勞働力の量の中、合計六千時間の勞働を必要な量の靴を製造するために割當てる。然るに吾々の今日の社會では、生産が無組織でありそれ故に甚だ不確定な要素が加つてゐる。各製造業者は銘々勝手氣まゝに營業してゐるので——例へば一千足の靴の代りに一千二百足の靴が生産されるといふやうなことが起るのである。一足の靴を作るには生産條件に應じて各々六時間の勞働量が費された。ところが社會全體は靴の總量に對して六千時間以上を費すことは出来ない。その結果靴はそれが生産に於いて得たところの價值よりも低く賣られることとなるのである。

社會が靴の生産のために割當てたところの六千時間の勞働が一千二百足（靴が實際に生産された數）を以つて割られる。この割算の結果は各一足の靴に對しては五時間となり、一足の生産價值が六時間であるにも拘らず價格は五時間の勞働量に等しいものとなるであらう。更に又一千足の靴の代りにたゞ八百足しか生産されなかつたといふやうなことも假定され得ることである。そ

「社會的必要勞働」の價值

「社會的必要勞働」の價值

の結果は靴の欠乏が生じて來て、今や一足の靴の價格は七・五時間といふことになるであらう。即ち、市場價值は實際の生産價值を一・五時間だけ超過するに至るのである。

かくて吾々は次の如くいふことが出来る。「價格は需要及び供給の條件に應じて、市場に於いて決定されるのである。」と。何故ならば、吾々は市場に於いてのみ初めて生産物の必要量が生産されてゐるかどうか、それよりも多いか或は少ないかを知ることが出来るのだからである。しかしながら貨物の固有價值（生産價值）は、供給及び需要の關係を何等顧慮することなく、生産條件に應じてその前に決定されてゐるものなのである。

今、藝術上の勞作に對しては社會が二萬五千時間の勞働を割當てゝゐると假定する。この勞働時間がその後、例へば繪畫ならばその生産された數で割られるのである。若しもたとゞ五點の繪畫が市場にあるとするならば、各一點の繪畫の價格（市場價值）は個々の藝術家がその繪畫の創作にはるかにより少ない時間を費したかも知れぬといふ事實にも拘らず、五千時間の勞働量に等しい價格となるであらう。

さて、このマルクスの勞働價值説の優れた點は、それが吾々をしてあらゆる經濟的現象——價

格の現象すらをも——一つの原理、即ち社會的必要勞働に依つて充分に説明することを得せしめる點に存してゐる。この學說によれば、價格も亦勞働の社會的効用により——各個の生産物が生産條件に應じて要すべき社會的勞働時の量によつてではなくして、むしろ社會がその種生産物のすべてに割當てるところの、社會的勞働の總量を實際に生産された生産物の數を以つて割ることによつて決定されるのである。

右の原理からして稀有品や獨占の下にある品物、及びその他あらゆる競争の支配から除外された商品の價格も亦、無茶苦茶に騰貴するやうなことは有り得ないといふ結論に到達するのである。何故ならば、それは各種生産物に對して一定量の勞働を割當てることにより社會が定めたところの限界を超えることは出来ないからである。獨占の下にある貨物並びに稀有品も亦前述の學說に依つて、その價格を決定するところの或る客觀的法則に支配されてゐるのであつて、リカードの學說によつて吾々が到達する結論のやうに、購買若しくは販賣者の氣紛れによつて決定されるものではないのである。——例へば吾々の先の説明に於いて、藝術家はその繪畫に對して最大限五千時間の勞働を受けることが出来る、が元來割當てられてゐるより以上を受けることは少し

「社會的必要勞働」の價値

も許されてゐないのである。

次章以下に於いて、吾々はいよく吾々がマルクスがその蘊蓄を傾け、一生の努力に依つて爲し遂げられたところの「資本論」中の「剰餘價值」及び「利潤」の學說に耳を傾けることゝしよう。

二七 利潤及びその源泉

前章に於いて、マルクスは既にあらゆる商品の價值が、その生産に於いて費やさるべき社會的労働の量であることを吾々に説明してくれた。——ある生産物が他の生産物と交換され得るといふ事實は、これら二つの生産物が等量の社會的労働を包有してゐなければならぬといふことを意味してゐる。

例へば、一人の洋服屋がその仕立に普通十時間を要すべきところの一着の外套を、一足の靴と交換せんとする時、その靴の生産にもやはり十時間の社會的労働量が含まれてゐなければならぬといふことは明かである、蓋し一圓と十錢とを無條件で交換しようと欲するものが決してないや

うに、何人といへども十時間の労働を含んでゐるところの貨物を、たゞ九時間だけの労働をしか含んでゐないところの貨物の代りに與へようとは考へないからである。又一方、普通の状態の下に於いては何人といへども十時間の労働との交換のために十一時間の労働を受取らぬであらうといふことは、丁度誰かが一圓の代りに一圓十錢を受取るといふことが極めてあり得べからざるが如く明白なことでもある。

元來交換の根本性質は、たとへ労働者が貨幣を以つて評價され、そして貨幣が靴屋との間の取引の媒介として承認されるとしても何等變りはないのである。例へば若し一圓の取得が約一時間の社會的労働を要するならば、その場合洋服屋は十時間の労働を包含するところの彼の外套に對して、一圓の十倍即ち十圓を受取らなければならぬであらう。靴に於いても亦同様である。

然しながらこゝで問題が起る。といふのは若しあらゆる商品が正確にその價值に従つて賣られてゐるならば、利潤なるものは一體如何にして如何なるところから生じて來るのであらうか？ 若しも貨物の賣買に於いて、各商品がその包含する労働の量によつて評價されるならば、商業取引によつて利益を得ることが結局どうして可能となるのであるか？ ——具體的に説明する方がい

の問題の意義と、それが何を教へるかを恐らくより明瞭に吾々に示すであらう。

先づ吾々は一つの煉瓦工場をその説明のための例に取ることにしよう。——煉瓦の製造には粘土、道具、燃料(薪)及び労働力といったやうなものが必要であることは諸君も既に御存じのことであらう。而して煉瓦一千ケのための粘土を得るのに、今假りに二十時間の社會的労働を費すものとする。若し一時間の労働を一圓と見積るとすれば、粘土の費用は一圓の二十倍即ち二十圓となる。煉瓦一千ケを作るに要する薪は三十時間の社會的労働を含むものとして、そこでこれの費用は三十圓といふことになる。必要な道具は三十五時間の労働を含んでゐるとしてこれが三十五圓に値する。以上のものゝ外に尙ほ労働者の労働力も亦欠くことの出来ないものである。そこには三人の労働者が働いてをり、そして一千ケの煉瓦の製造には三十時間の労働力を要するものとするれば、この場合に於いての計算に従つて各労働者は十時間働いて、一圓の十倍即ち十圓を受取ることとなり、その全労働の費用は三十圓といふことになる。で、煉瓦一千ケの生産のために要する経費の合計は大體次の如き數字となる。

粘土——二十時間の労働及二〇圓の費用を含む。

薪	——三〇	〃	三〇	〃
道具	——三五	〃	三五	〃
労働力	——三〇	〃	三〇	〃
合計	一一五時間、	一一五圓		

ところで、煉瓦の製造は労働者達はその道具を以つて煉瓦甕れんががまを熱し、粘土を捏ねて三十時間働いたのち、生産物——煉瓦一千ケが出来上る。しかし製造業者は彼自身の使用のために煉瓦を必要としてゐるのではない。そこで彼は煉瓦が賣買される市場までその煉瓦を運搬する雇人を幾人か雇つてある。この煉瓦の輸送のためには三十五時間の労働を要するものとする。そこで煉瓦販賣の手配に要する経費三十五圓の額が右の合計に追加つひかされて、その總費用は結局百五十圓となる譯である。

さて、市場でうまく煉瓦のお客が見つかつたのであるが、しかしこの買手は供給の全部(一千ケ)を必要としないで、彼はたゞ百個の煉瓦——即ち市場に持ち出された量の十分の一しか必要でない。客は何か他の貨物と煉瓦とを交易したいのだが、それらの貨物を携も帯びしてゐないので彼

は煉瓦に對して通貨（お金）を支拂ふ。煉瓦製造人は勿論その生産物を賣つて利益を得ようとしてゐるのであるから、彼の雇人は彼の命令に従ひ、煉瓦一ケにつき二十錢と見て百ケの煉瓦に對しては二十圓といふ價格を定める。然し煉瓦の精密な費用に關する吾々の算定に従つて、買手は——假りに彼がそれを知つてゐるとすれば——この申し出を馬鹿にして拒絶するだらう。先づ彼は一千ケの煉瓦の製造に要すべき労働時間を勘定する。「一千ケの煉瓦全部の生産に費された労働の量が百五十時間であるのだから」とこの買手は計算するのである。——「そこで百ケの煉瓦は十五時間の労働を含んでゐる。従つて煉瓦百ケの價值は丁度十五時間である。だから私はこれらの貨物の代りにたゞ十五時間の社會的労働に等しい價值を持つてゐる何ものかを生産者に對して支拂へばいゝのだ。一時間の労働は一圓に相當するのだから十五時間は十五圓に等しい。百ケの煉瓦はそこで十五圓である。丁度それだけをこの煉瓦百ケに對して支拂はう。それ以上は出せない。」

吾々の理論を文字通りに解釋するならば、買手の側に於ける以上の抗議は全く正しいものである。吾々は彼が煉瓦百ケの代りに二十圓を與へることに依つて、その實際の價值が十五圓（十五

時間の社會的労働) 以上でない時に、煉瓦製造人に對して拂ひすぎることを要求するわけには行かない。今若しもこの製造者が十人の右のやうな買手を持たなければならぬとすれば、彼は明かに一錢のハシタ錢をすら利得するにとは出来ないことになるであらう。そしてすべての買手は煉瓦の價值を算定し、そしてそれに對して嚴密にこの計算に従つて拂ふことであらう。一千ケの煉瓦に對して製造者は百五十圓を受取り、それ以上は一錢をも受取らぬであらう。若しもこの製造業者が運よく煉瓦の生産に自ら少しばかりでも働いてゐたならば、その時は彼も亦一時間の労働について一圓の割合だけをその努力に對して受取ることが出来るであらうが、しかし普通の雇主「産業の船長」達は實際に於いてどの位労働してゐるであらうか？ 當の手段を所有することにより、労働者の労働と生活を支配してゐるところの近代の資本家は、自分を普通の労働者以上のものだと考へてゐるのだ。そして自分の工場の機械の齒車に指一本でも觸れようと思ふことさへ、自分の手を威嚴とを汚しはしまいかと恐れてゐるのである。

二八 利潤の謎を解く鍵

ところで、資本家乃至労働者の雇主達が前記の如くであることは、吾々をして再び如何にして利潤は可能であるか？ といふ先の疑問に立歸へらせらるだけである。即ち、年々月々、時々刻々の中にさへ彼等資本家達によつて刈り入れられ、そしてそれが數千數億萬圓にも達するところのこの産業利潤といふ信じ難いほどの利得は一體全體何處から、如何にして生じて來るのであるか？

一寸考へたところでは、産業に投下された資本が新しい價值を創り出す力を持つてをり、資本家に對して有利な所得を保證するのであるやうにも思へるであらう。ところが、問題を一層注意深く考察してみるならば、さうした一般的な印象の如何に淺薄であつたこと、それが如何に根本的に間違つてゐたかが明かとなつて來るのである。

——例へば商人宮崎氏は山口氏から百圓の値ある茶を買ひ、その後この茶を平尾氏に百圓、即ち十圓の利益を得て賣つたとする。宮崎氏は元々茶を買ふために貨幣で百圓を持つてゐた。山口氏は百圓に値する茶を所有しそして平尾氏は貨幣で百圓を持つてゐた。これら三人のすべてが持つてゐた貨幣及び貨物の總計は即ち三百十圓であることになる。宮崎氏が山口氏の茶を買つ

てそれを平尾氏に轉賣したのち、山口氏は百圓に値する茶の代りに今や貨幣で百圓を所有してゐる平尾氏は百圓の代りに今や茶を持つてゐる。宮崎氏は百圓の代りに百十圓を持つてゐる。こゝに於いて價值の總計は今や取引の終つた後、取引以前よりも多或少なくもなつてはゐないのである。取引の以前には宮崎氏と山口氏と平尾氏とは合せて三百十圓（貨幣が二百十圓と百圓に値する茶）に相當する價值を持つてゐた。そして取引の終つたのちもその總計はやはり同じである。たゞ貨幣の額と貨物の所有主が變つただけで價值の總計は依然として同様である。交換の前には百十圓が平尾氏に屬してゐたのであつたが、今や取引の後それは宮崎氏に屬してゐるのである。茶は同様に以前は山口氏に屬してゐたものが今や平尾氏の手に入つてゐる。けれどもこの場合、茶が宮崎氏の持つてゐた時よりも高い價值を得たと假定することは馬鹿けた考へ方である。然し茶が未だ山口氏の手にあつた時、それは實は百十圓に値してゐたのかも知れないといふことは考へられる。そして宮崎氏が利巧な商人であつたので或る策略を以つて百圓といふ安い價值でその茶を買ふことに成功したが、平尾氏に轉賣する時には宮崎氏はその茶の充分な價值、即ち百十圓を受取つたといふこともあり得るわけである。若しさうだつたとすれば取引の以前に三人合せて

(宮崎、山口、平尾) 三百二十圓の價值——即ち山口氏は百十圓に値する茶、宮崎氏は貨幣で百圓、そして平尾氏貨幣で百十圓を持つてゐたのであつたが、取引の後にも價值の總計はやはり三百二十圓——即ち宮崎氏は貨幣で百十圓、平尾氏は百十圓に價する茶、そして山口氏は貨幣で百圓——であつたといふことになる。

右の中いづれの場合にしても、——價值の總計が三百十圓でも三百二十圓でも——貨物が取引の過程に於いて何等の新しい價值をも得なかつたといふことは明かである。そこで宮崎氏が十圓といふ利益を得ることが出來たのは、たゞ他の誰か十圓の損失をしたためのみでなければならぬ。——即ち第一の場合ならば平尾氏が馬鹿を見たのであり、若し又第二の場合であるならば十圓の損失をしたのは山口氏であつたのだ。

右のやうな場合ではなく、ある特別の事情の下に於いては、時に或る個人が一曲の小唄の代りに高價な寶玉を買つたり、或は誰か他人をベテンにかけて或る品物に對してその實際の價值以上を支拂はせたりして大安物を掘出すやうなことも往々あり得ることであらう。そうした事情の下に於いては、しば二百時間の労働を含んでゐる商品をもたつた五十時間の労働價を以つて買取る

こともあり得るかも知れない。けれどもさうした場合は決して正常普通ではあり得ない。それはたゞ何等かの奇蹟によつて、賣手か或は買手かのどちらかが彼の商品の充分な價值を知らない時にのみ初めて可能とされることなのだ。かゝる例は極めて稀有であつて、一般には社會の經濟生活が奇蹟や詐欺によつて支配されてゐるといふのは、むしろ酷すぎるやうに思はれてゐるのである。

實際、それどころではなくこれは全く不可能なことなのである。何故ならば、この考へ方に依るとすべての人は必ず他の誰かの損失に依つて儲けなければならず、Aの利得はBの損失であるといふことになる譯だからである。こんなことは明かに現實には起つてゐないやうである。富は年々に増加してゐるが、しかも何人もこの一般的増加によつて實際に損失を蒙つてゐるものはないのである。

こゝに於いて、吾々の問題は甚だ困難となつて來る。——若しも吾々が貨物の價值はそれが包含するところの労働の量であるといふならば、それでは一體全體何處から、如何にして利潤といふものは生じて來るのであらうか？

吾々の右の質疑に對して吾がマルクスは明確に答へていつてゐる。

「利潤は餘剩價值より生ずる——」

餘剩價值の學説は最も重要なマルクスの發見の一つである。勞働價值論に於いては、吾々の既に見た如くマルクスは幾人かの先達を持つてゐた。けれども、餘剩價值説は全くこの科學的社會主義の偉大なる建設者たるマルクスに依つてのみ初めて發見され、組織的にいひ現はされたものである。そして餘剩價值の學説こそは疑ひもなく無限に重要な發見であつたのである。それは複雑な經濟生活の歪められた現象に對して、全く新しい光を投じたものであつて、エンゲルスはそれだからこそこれを史的唯物論の學説と共に列擧したのである。

二九 勞働力即ち人間の生命

マルクスはその餘剩價值説を説明するに當り、先づ經濟的「財」或は「貨物」——即ち商品を細密に分析してゐる。

「一の經濟的貨物は二つの根本的性質、自然的及び社會的性質を持たなければならぬ。商品の

性質の自然的方面とは人間の必要を満たすところの効用であり、社會的方面とはそれが包含するところの社會的勞働の分量である。商品の社會的性質はその自然的性質なしには決して存在し得ないのだ。若しある人が何等の効用もないものを生産するとすれば、彼の勞働は少しも社會的價值を持たないであらう。社會的勞働はその中にそれが具體化せられ得るところの何等かの有形的なものを持たなければならぬ。そしてこの實在的なものは勞働が加へられて有用物とならなければならぬ。かゝる具體的な効用性なくしては或る生産物の社會的性質を認めることの不可能であることは、猶ほ肉體なくして靈魂を認めることの背理であると同様である。それが含むところの勞働の量はその有用物の社會性の表象である。

吾々が或る商品を買ふ時、吾々はそれが含むところの勞働——即ちその社會的方面に對して支拂ふのであるが、しかし吾々はその商品から引出すところの効用はその自然的方面によつて生ずるのである。例へば、麻糸商が麻を買ふ場合、彼はその生産に費されたる社會的勞働の量に對して支拂ふのであるが、實際には彼はたゞ麻の綱に製造される自然的性質のみを利用するのである。洋服屋も亦同様に織布の自然的特性——衣服に縫はれる性質を利用する目的のため

にのみそれを買ふのである。

上記の如き性質の外に尙ほ或る生産物が商品となるためには、他の第三の性質を持たなければならぬのである。それは即ち所有者を持たなければならぬのである。即ち、それは自由に生産物を彼の欲するがままにすることの出来るところの何者かの財産でなければならぬ。見なれない新しい品物は通常賣り或は交換することが出来ない。更に又商品の所有者はそれに對して決して直接の個人的用途を持つてはならない。若しも或る貨物の所有が彼自身の使用のためにそれを必要とするならば、彼は勿論それを賣つたり交換したりしようとはしないであらう。

以上列擧されたやうな性質を持つものゝみが嚴密な語義に於ける商品となることが出来るのである。

さて、奴隸及び農奴制度が行はれてゐたところの先の時代に於いては、勞働力は決して商品ではあり得なかつた。蓋し勞働力の所有者——人間——が自由にそれを使用する権利を持たなかつたからである。奴隸はその主人の財産であり、そして生命も肉體も亦彼の生産するすべてのもの。

のもその主人の所有に屬してゐたからである。奴隸が封建時代の族籍制度に於ける農奴にとり代へられた時、そして中世の社會秩序が人を結びつける不斷の鎖となつた時、農民は肉體的には比較的自由であつたのだが、しかしその勞働力は領主の所有に屬してゐたのであつた。——領主は人間的勞働を支配してゐたが、しかし人間を、農民自身を支配し自由にしてはゐなかつたのである。その後、封建主義が消滅して農民が地主の——封建貴族の支配から徐々に解放され、そして増大し行く都市の産業が自由に發展し初めた時、始めて勞働者と職人とは彼ら自身の勞働に對する所有者——主人となつたのである。しかし永い間、農民と勞働者とは彼自身の個人的勞働に依つて生活してゐた。手工職人が彼自身のために彼自身の道具を以つて彼自身の小さな仕事場で働き、そして彼自身の原料を買つてゐた間は勞働力は未だ商品ではなかつたのである。職人は銘々勝手に小規模に働き、そして彼自身の必要のために彼の勞働を利用してゐたのであつた。

ところがその後、資本主義及び工場制度の勃興と共に、個々の職人の小さな仕事が大工場に依つて押しつけられて巨大な産業組織が發達して來た時、獨立した手工業者は最早や大經營の産業組織に對しては競争することが出来なくなつて來て、結局彼の簡単な仕事場と道具とを抛棄しな

ければならなくなつた時、労働者が最早や彼の労働力を彼自身の必要のために使用し得なくなつた時、——その時に於いて初めて労働力が商品となり、そして他のいろ／＼な商品と共に市場に於けるその地位を得るに至つたのである。他のあらゆる商品と同じく、労働者も亦二つの固有的性質、——自然的及び社会的な特性を持つてゐるものであつた。労働力の自然的方面とは原料を社会的有用物に變ずるところのその性質をいふのであつて、労働力は單なる皮革を一足の靴に製し、麻を綱に、鐵を道具や機械に作り變へるところのものである。そして社会的方面といふのは労働力を創り出すために要すべき社会的労働の量であるのだ。

さて、今日の如き賃銀労働制度の下に於いては、労働力が普通の一商品であること、他のあらゆる商品と共に同じものであり、更に又それと同様の性質を有するところの商品、他のどの商品とも全く同様に賣買されるところの経済的貨物であることは否定することの出来ないところである。——それはマルクスがその鋭い分析を以つて正しく吾々に證明してゐる通りである。

こゝに於いて、「如何にして労働力は生産されるのか？——如何なる方法によつて人間の精力が創り出されるのか？」とマルクスは更らに問を發してゐる。そして彼はそれに答へていつてゐる。

「労働は人間の生命と別な何物かではない。——それはすべて生きてゐる人間の特性であり内在的資質である。それは人間の脳髓、血液、筋肉及び神経の一部であり従つて労働力は人間の生命そのものから分離され得ないものである。しかし労働力は労働する能力を要求する。人はたゞ彼が生活の必要を満たし得る時にのみ労働する能力を有つてゐる。そして生活の必要の充足が労働力を創り出す以上、その結論は次のやうにいひ現はすことが出来るであらう。——即ち、労働力の價値は人間の生活必需品の生産に費さるべき社会的労働の量に等しい。」と。

三〇 餘剩價値の正體

吾々各個人の必要は極めて種々複雑である。何故ならば、吾々人間はその環境を支配してゐるさま／＼で複雑な社会的、文化的及び自然的條件に依存して生活してゐるものであるからだ。

暖國に於いては人間の根本的必要が比較的僅少である。即ち、簡単な住居、薄い衣服、軽い食物で充分であるが、寒國に於いては人間の労働力を維持するために必要なものが一層複雑となつ

て来る。即ち、よく寒さを防ぐに足る住居、厚い衣服、脂肪分の多い食物が必要とされるのである。古代に於いては、同様に人間の必要が今日よりもはるかに簡單であつた。吾々の祖先達は吾々が今日するやうにその風彩に撰り好みをしなかつた。數世紀前の無骨な平原の居住者達はたつた腰巻一枚で歩き廻ることに満足してゐたのであつたが、現代のその子孫達はその優れた文明を誇りとしてゐるのだ。彼等は單にその肉體をつむむだけの着物ではなく、その折々の流行の風俗と習慣とを保つに足る着物を必要としてゐる。たゞ雨露を凌ぐに足るだけの頭上の屋根ではなくて、近代的建築法と近代的改善とを加へたところの住宅を必要とし要求してゐる。

更に今一つ考へなければならぬことは、労働者が勿論永遠に生きてはゐないといふことである。彼等は老い、衰へ、そして年を取ると共にだん／＼その精力、即ち労働力が減退して行くことは周知の事實である。そこで現代に於ける労働力の購買者達は、労働力の生産されるところの工場が、世界の産業のために人間の材料を供給することを止めないやうに氣をつけねばならぬ。労働者は他のあらゆる生物と同じやうに、たゞ彼が家庭生活を営むことに依つてその種族を存続する可能を許され、そして彼の子供が次代に於いて彼に代つて後をつぐやうに彼等のために

準備し得る時にのみ、永遠の存在を持つことが出来るのである。

こゝに於いて、労働力の價値に關して以上述べ來つたところを要約するならば、吾々は次の如き結論に到達することが出来るものである。——「労働力の價値とは、労働者の住む國の自然的、社會的及び文化的條件に應じて、彼自身及び彼の家族に對して生活資料、即ち衣食住を供給するために必要なところの社會的労働の量である。」と。

今假りに労働者が、一日の労働（十時間）の能力を持つたために、そのさまざまに必要な充足に費されねばならぬところの社會的労働の量を五時間と假定しよう。即ち、五時間の社會的労働の支出は労働者自身及びその家族に一日の休養手段を提供するに足るのである。そこでこれよりして、一労働日（十時間）に使はれた労働力の眞實の價値は、たゞ五時間の労働であるといふことになる。何故ならば、吾々の原理に依つて労働力の價値は生活資料の供給に必要な社會的労働の量に應じて決定されるのだからである。この十時間の労働日の價値を決定するところの、労働力の量を超過する残りの五時間が、即ち餘剰價値を構成してゐるものなのである。

「労働力は餘剰價値を創り出すところの唯一の商品なのである。」とマルクスはいつてゐる、勞

働力の價値は常に勞働力そのものよりも少ないのだ。そしてこの勞働力の生産のために必要な社會的勞働の量と勞働力そのものとの間の差が、即ち餘剰價値を形作つてゐるのである。——この勞働がそれ自身の要する費用以上に生産するといふ性質こそは、吾々の經濟生活に於けるあらゆる利潤現象の原因を爲してゐるものであり正體なのである。

若し勞働者が彼自身の道具と彼自身の原料とを持ち、そして若し彼がその勞働力を彼自身の目的のために利用することが出来るならば、その時には彼の創り出した餘剰價値は彼の手許に残されるであらうが、しかし吾々は今日私有財産を基礎としてゐるところの社會に生きてゐるのである。そこでは生産の手段——即ち、土地、機械、道具及び原料のすべてが資本家權力者階級によつて獨占されてをり、従つて吾々勞働者階級は後等ブルジョア階級に對してその勞働力を賣るより外には生活の手段がないのであるからして、餘剰價値の利益はその全部を×××××に搾取されてしまふのに反して、吾々勞働者の報酬はその勞働の結果のほんのハシタに過ぎないのである。

例へば百時間の勞働力を買ふ工業資本家は、その勞働に對して百圓（一時間の勞働を一圓に等

しいと見て）を拂ひはしないのである。何故ならば、彼は生産物に包含されてゐるところの勞働力に對して支拂ふのではなくして、百時間の勞働のための能力を創り出すに必要な勞働力に對して支拂ふのだからである。若し後者がたゞ五十時間であるならば、資本家は彼の買ふ勞働に對してたゞ五十時間（五十圓）しか支拂はないであらう。ところが、この買はれたる勞働力に依つて彼は百時間の勞働を得ることが出来るのである。こゝに於いて餘りの五十時間（五十圓に等しい）は、餘剰價値の法則に従つて彼等資本家に總額五十圓の利潤を獲得せしめることとなるのである。しかもこの資本家は營業道德なるものに依つて表面上全く是認せられ、彼は餘剰價値からこの利潤を引き出すことにより吾々勞働者に對して、些かの損害をも與へてはゐないかのやうに見られてゐるのである。

勞働力は他の商品と同様に一の商品である。——と彼等資本家階級は論駁してゐるのである。

——「恰もすべての商品が嚴密にその包含する勞働時、即ちその社會的性質に應じて支拂はれてゐるやうに、私は勞働力といふ商品に對しても亦それと同じく、その中に含まれてゐる社會的勞働の量に應じて支拂つてゐるのである。若し私の買ひ入れる十日間の勞働力の中にたゞ五十時間の

勞働、即ちこの十日の期間中生活手段を供給するに必要な勞働の量をしか包含されてゐないとすれば、そこで私が買入れた勞働時に對して五十時間の等價を支拂ふのは、この量が十日間の勞働力の眞實の社會的價值を代表してゐる以上は少しも不當なことではないのである。私が契約したところの勞働力から引き出す効用は、それとは全く別の問題である。若し私が十日間の勞働力を百時間の勞働の生産に利用しても、それは全く他人の關することではないのである。——私は私の財産を私の好きなやうに使用する權利を持つてはゐないであらうか？ 私が勞働力といふ商品を買ふ時、私はその社會的性質に對して支拂ふのである。商品が私の財産になつた以上、私が私の商品の自然的性質を最も有効に利用しようと考へるのは、如何なる點から批判しようと當然至極のことであるぢやないか……」

三二 餘剰價值と利潤の關係

こゝにおいて吾々は吾々が先に引いた煉瓦工場の例に歸つて、あの場合如何にして利潤が餘剰價值に依つて可能となつたかを見ることとしよう。

若しも煉瓦が全く何等の勞働力の支出なしに、粘土と薪と道具とに依つて作られ得たものとなれば、煉瓦製造所の持主は實際少しも利潤を上げることは出来なかつたであらう。何故ならば、すべて如上の諸成分は何等總計の増減なく、精製品（煉瓦）の中にそれらの價值を合成してゐるからである。諸成分の價值（包含されてゐるところの勞働によつて算定された）が全體の價值を形成するものと考へられる以上は、價值の合計、即ち總費用が諸成分の價值を加へ合せた結果より多くも少なくもあり得ないことは明白な事實である。だが、企業家のためにたゞ一つ残されてゐるところの要點は、與へられた成分を以つて煉瓦を作るためには勞働力（この場合には三十時間の勞働力）の支出が缺けてゐてはならぬといふことである。企業家は必要な勞働力を三人の勞働者から各々十時間宛買入れる。けれども彼は吾々の既に考察した如く、各勞働者に十圓宛（一時間一圓の割でしか支拂ひはしなかつた。その代りに彼は先づ勞働者が十時間勞働する能力を持ち得るために彼の必要を満たすに要するところの、さまざまなものゝ費用を計算するのである。十時間の勞働のための能力を創り出すためには、勞働者は諸君の知つてゐる通り彼自身及び彼の家族のために充分な住居と食物——一言にすれば一日間の休養手段を支給されなければならぬ

い。若し一日間の労働者の生存のためのこれらの緊要物を支給する費用が五圓（五時間の社會的労働）に過ぎないならば、そこで五圓が三人の労働者各自の報酬としての賃銀であるだらう。けれども煉瓦製造所の持主は彼の買入れた労働力を各労働者によつて十時間の労働を生産するために利用するのである。かくて加へられた五時間（餘剩價值）の利益が企業家の手許に残されることとなるのである。この場合そこには十五時間の餘剩價值が残る。——即ち一千ケの煉瓦の生産に依つてこの企業家は十五圓の餘剩労働を得ることが可能とされるのである。

さて、吾々がこゝで特に「餘剩價值」といつて「利潤」といはないのは、實際上眞實の利潤は餘剩價值よりも幾分少ないものであるからだ。吾々が挙げた先の例の場合に於ける十五時間の餘剩價值はそれだけの利潤にはならないであらう。といふのは右の中、若干部分が税金の支拂ひ及びその他さまざまの出費のために排除されなければならないからである。又若し企業家が充分の資本を持たずに利子を拂つて金を借りたのならば、借金の利子は餘剩價值から控除されなければならないところの経費の一つである。で、眞實の、或は「純」利潤は生じた出費の種々な項目を餘剩價值から差引いたところの残額に相當するものである。

それはとに角として、餘剩労働がたゞ労働費用のみに關して計算されるに對し、利潤は企業に投下された全額の控除の後に算出されるものであるといふことを知るのは極めて重要な點である。

先に挙げた例の場合に於いて、餘剩價值は完全に百パーセントに達するのである。煉瓦製造所の持主はその賃銀に於ける十五圓の投資につき、十五圓の餘剩價值——即ち、労働に於ける彼の投資の丁度百パーセントを受けてゐるのである。しかしながら、純利潤ははるかにこれよりも少ない。何故ならば、吾々はたゞ労働に對して支出された十五圓だけではなく、これらの一千ケの煉瓦の生産に投下された全額を考慮に入れなければならぬからである。「餘剩價值率」はたゞ労働力の結果として加へられるところの餘剩の評価のための手段としてのみ吾々に役立ち得るのであるが、他方に於いて「利潤率」は企業、労働、原料、建物、利子等に投下されたところの全資本の純利潤なのである。

こゝに於いて餘剩價值は不拂労働——即ち労働者が受取るところの賃銀を生産するために必要な時間以上の餘剩労働力である。餘剩價值は生産手段が私的に占有され管理されてゐるところの

社會狀態、少數者が多數者の生活手段を支配してゐるところの社會、労働者がその労働力を産業の主人に賣ることを餘儀なくされるところの制度の下に於いてのみ初めて可能とされることなのである。従つて利潤及びすべての富の源泉は餘剰價值の中にある。そして不拂労働が資本家的收入の殆んど全部を構成してゐるものである。

尙ほこゝで一寸注意しておかなければならないことは、マルクスが利潤の源泉は餘剰價值であるといふ時には、彼はより多くの餘剰價值を許すところの企業は亦より多くの利潤をも與へるものであるといふ意味ではないのである。こゝに考へられてゐるところの利潤とは社會全體の總利潤を意味してゐるのである。

資本があらゆる經濟的活動の原動力であるところの今日の我が資本主義社會の下に於いては、産業的企業に於ける個々の投資者はその企業に於いて創り出された餘剰價值の量に應じてではなく、彼の投下した資本の量に従つて利潤を取得してゐるのである。餘剰價值はなる程社會全體が獲るところの利潤の總額である。何故ならば、若し餘剰價值がなかつたならば利潤も亦決してあり得ないからである。けれども利潤の分配に於いては資本が主役を演じてゐるのであつて、資本

は個々の資本家達の利潤として、餘剰價值を配當するところの主動者であるのだ。

吾々は經濟學に於いて特定企業の内に如何に資本が支出されたか、主として労働力に對して支出されたか、それとも要具或は原料に對して支出されたかといふことに拘らず、「投資に準じて利潤を與へる」といふ有名な原則を持つてゐるのである。より多くの投資はより多くの利潤を生む。——それがより少ない餘剰價值を創り出すやうな企業であるか否とに關するところではないのである。ところが社會全體の得る利潤は社會が創り出した餘剰價值の總額に依つて決定されるのである。餘剰價值が多ければ一般的利潤の總額も亦多いのである。けれども個々の資本家の得る利潤は、彼の企業に於いて實現された餘剰労働によつてではなくして、彼の投下した資本の大小によつて決定されるものなのである。

三三二 労働と資本の闘ひ

かくて吾々はたゞ少數の労働者を雇つてゐるところの多くの企業が、それにも拘らずより多くの労働者を雇つてはゐるがしかしより少ない資本しか投下されてゐないところの、他の諸企業よ

りもより大なる利潤を獲得し得るといふ事實を説明することが出来るのである。それ／＼個々の場合に於いて、企業家は其の特定企業により創り出された剰餘價值の量からではなく、彼がその工場、職場或は鑛山に投下したところの資本の量に應じて彼の利潤を抽め出して來るのである。

尙ほ、剰餘價值は必ずしもそれを創り出したところの個々の企業家の手に入るものとは限つてゐない。それはすべての資本家によつて彼等の間に分配されるのである。さきにもいつたやうに或る部分は金貸に與へられ、他の一部分は亦仲買人や小賣人に取られるといふやうに。そして一般に吾々は、何等かの企業に何等かの種類の投資を爲したあらゆる資本家は、たとへ剰餘價值が何處で創り出されたのであらうと、その剰餘價值の一部分を受取るものであるといふことが出来るのである。——何等かの産業的企業に於いて、可能なる利潤の限度を數學的に云ひ表はすとき、吾々は利潤が社會に依つて創り出された剰餘價值の總額を、個々の投資を以つて割つて得たところの結果に等しいことを知るのである。

さて、マルクスの剰餘價值説の發見が經濟學界に貢獻したところは、決してその重要性に於いては、かの史的唯物論が哲學界に貢獻したところよりも劣つてはゐない。そして近世社會主義が上

來述べ來つたところの二つの偉大なるマルクスの學說——唯物史觀説と剰餘價值論——の上に打ち建てられてゐるものである。と、かのエンゲルスのいつた言葉は何人も否むことの出来ない事實でなければならぬ。これら二つの重要な學說の中に含まれてゐるところの教義は、その調和せる全體を形成してゐるのであつて、吾々はそれによつて吾々の社會に於いて行はれてゐるところの激烈な階級闘争の真相を知ることが出来るのである。

史的唯物論が吾々に對して、プロレタリアートが社會主義的利片を要求するところの新しく發展した生産力を代表してゐることを教へるとすれば、剰餘價值説は吾々に對して、プロレタリアートが社會のための唯一の稼ぎ主——他の社會全體がその支持に倚つてゐるところの唯一の支柱であること、又資本家階級の収入が不拂勞働から得られるものであること、及び若し勞働階級がなかつたならば社會は決して自立することが出来ないであらうといふこと、そして尙ほプロレタリアートこそが新しい社會秩序を創り出す力を有つてゐるものであることを教へてゐるのである。

更になほ剰餘勞働論は、勞働者が社會の一切の富を創り出すにも拘らず、その作り出した生産

物中の労働者の分け前は、いよ／＼ますます／＼少なくなりつゝあるといふことを吾々に示してくれてゐる。そしてそれが（労働者への分け前が）次第に少なくなつて行くのは、労働力の価値が絶えず減つて行きつゝあるからである。

近代産業の高度に發達した能率に依つて、労働者の生存に必要なさ／＼のものと生産に要する労働の量は次第に減少しつゝあるのだ。こゝに於いて必然に労働者の労働力の価値が不斷に小さくなつて行くと同時に、一方では資本家の獲得する餘剰価値はいよ／＼ますます／＼着々として増大しつゝあるのである。——例へば、若し以前の産業的條件の下に十時間の労働日の価値が五時間であつたとすれば、その現在の価値は改善された産業状態の下にたとへば四時間に過ぎないであらう。これは何を意味してゐるのか？ それは以前労働者は五時間の餘剰価値を生産物に寄與してゐたのであつたが、今や彼は六時間を寄與してゐるといふことを意味してゐるものに外ならない。そしてかうした過程は尙ほ月に日に發展し繼續されてゐるのである。かくて餘剰価値の限度はいよ／＼擴大しつゝあるのに反して、労働者の勞苦によつて創り出される富の中のその分け前はますます／＼いよ／＼減少しつゝあるのである。労働と資本との間の大きな裂け目が、いよ／＼ま

す／＼廣く且つ深刻化しつゝあるのを吾々は見る。そしてXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX、XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX、XXXXXXXXXXXX、XXXXXXXXXXXX、XXXXXXXXXXXX、XXXXXXXXXXXX、XXXXXXXXXXXX、XXXXXXXXXXXX、XXXXXXXXXXXXとして現出するのである。

さて、吾がマルクスは吾々に對して切迫してゐるプロレタリアートのXXを示すのみにとゞまらず、彼は又如何にして如何なる方法に依つてプロレタリアートが必然に勝利を得るかといふこと、及びその究極の解放のための闘争に於いて、XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXをも吾々に指し示してくれるものである。マルクスは吾々のために、階級闘争の進歩と社會進化の推進力へ永遠の行進に於ける、その豫定せられたる結果とを如實に描寫し説明してくれたのである。

即ち、マルクスは吾々プロレタリアートに呼びかけ、叫びかけ、而して教へ導くために云つてゐる。

「産業の發展はより高い段階に進む。即ち小規模生産は集中され、集積された産業組織にその所を譲る。小企業者は大企業の壓倒的競争によつて粉碎せられ、プロレタリアートの伍列に入ること餘儀なくされる。かくて中間階級よりの不斷の加入によつてプロレタリアートの數は

三三 成長する資本

さて、吾々はこれから資本なるものは元來如何なる性質を持つてゐるものであるか？ といふこと、及びその資本の消長とそれにつれて動く物貨の足迹を辿つて見ることにする。

「——そもく「資本」なるものが成立し、そしてそれが包含するところのものは、先づ原料、労働要具、及び諸種の生活資料から成り立つてゐるものであつて、それが更に新たな原料、新たな労働要具、新たな生活資料の生産のために使用されるところのものである。そして以上の如き資本の構成物は、すべて労働に依つて作られたもの——即ち労働の結果作り出されたものであり、所謂「蓄積された労働」なのである。」とある一部の經濟學者達は、資本について右のやうな説明をこゝろみてゐる。

けれども、彼等の右の如き説明はニグロの奴隷を黒人だと説明するのと何等相異のあり得ないものである。黒人は何處まで行つても黒人である。たゞそれがある條件の下に置かれることに依つて初めて奴隷たり得るのである。——紡績機械は糸を紡ぐ機械である。が、それはたゞある條件

の下に置かれてこそ初めて資本となり得るのである。けれどもそうして資本たり得てゐるものも、それらの「ある條件」から切り離されたならば、金塊おんがひがそれ自身では貨幣としての價值を持つてゐないと同様に、紡績機械は決して資本たり得ないのだ。

およそ人間が生産を行ふためには、たゞ單に自然界に對して働きかけるばかりではなしに、又人間相互の間に働きかけなければならぬものである。そして吾々人間は或る方法に依つて共同に働き、又互ひにその働きを交換することに依つてのみ生産を営むてゐるのである。——即ち人間が生産を営むためには、必ず相互の間に一定した社會關係を作るのである。そしてその社會關係の下に於いてのみ自然界に働きかけることが可能とされ、こゝに於いてのみ初めて生産が行はれることとなるのである。この社會關係と、及び人間が相互に働きを交換して生産行爲の全體に参加するその條件とは、その時々々の生産方法の性質に従つて自然に變化するものであることはいふまでもないことであらう。

かくして生産の社會的關係はその生産方法の發達、——即ち生産力の發達と共に變化するものである。そしてこの生産上の諸關係の總和が即ち謂ふところの「社會」を構成するに至るのである

但し、その社會といふところのものは歴史の發達上に於ける或る一段階としての社會であり、その時代々に相應しての特殊な性質を有する一社會のことなのである。即ち古代に於いては奴隸制度の社會、中世に於いては封建制度の社會、而して近代に於いては現に吾々が生存しつゝあるところの資本主義制社會、これらがすべて皆それ〴〵にその當時の生産關係の總和を表現してゐるものであつて、人類の歴史の發展上に於ける特殊な階段をそれ〴〵示してゐるものである。

以上の關係を今少し詳細に説明するならば、人間の社會は昔から今日までいろ〴〵に變遷して來てゐるが、それは人間の生産方法が發達するにつれて、生産を行ふについての人間同志の間の諸關係が變遷したからに外ならない。そしてその生産事業についてのいろ〴〵な關係が集つて、その時代々の社會を構成して行くのであるから、自然この社會には古代、中世、近世などゝいふやうな差別が生れて來て、その時代々に相應したそれ〴〵の特殊な性質を示してゐるのである。實例を擧げて説明するまでもなく、古代では主人が奴隸を養つてその奴隸に生産をやらせるといふやうな社會關係が存在したのであるし、中世に於いては大名が農奴を支配して、その農奴に生産をやらせるといふやうな社會關係があつたことは諸君も既に學び得てゐることであらう。

右の如き社會關係が即ち奴隸制度、封建制度といふそれ〴〵特殊な性質を持ち、又それが歴史の發達して來た階段となつてゐるものなのである。

ところで、資本といふものもやはり生産上の社會關係に外ならないものである。即ち、資本家制社會に於いての生産關係なのである。——原料、労働要具、生活資料、これらのものに依つて資本なるものは成立してゐるのである、と或る一部の經濟學者達はいつてゐるけれども、その諸物品は或る特殊の條件の下に於いて、ある社會關係の中に於いて初めて産出され蓄積されたものなのである。又その諸物品は或る特殊な條件の下に於いて、或る社會關係の中に於いて初めて新たな生産に使用されるものなるのである。さうしてこの特殊な社會的性質が、即ち右に記したやうな諸物品に對して「資本」といふ烙印を押すものに外ならないのである。尙ほこゝで今一度考察してみなければならぬことは、資本が原料、労働要具、生活資料だけから成り立つてゐるものではないといふことである。——即ち、有形的な生産物だけから成り立つてゐるものではないといふことである。それは同時に交換價值から成り立つてゐるものなのだ。資本を構成するところの生産物はすべて亦商品なのである。故に資本は一定量の有形的生産物であるばかりではなく

又一定量の商品であり交換価値でもあるのだ。

例へば木綿糸を絹糸に代へ、麥を米に、鐵道を汽船に代へやうと、資本としては何等の變りもあり得ないのである。たゞ資本の實體たるところの絹糸や米や汽船が、以前の實體たるところの木綿糸や麥や鐵道に比べて同じやうな交換価値、同じやうな価格を保持してゐればそれでよいのである。たとへ資本の形態が絶えず如何様に變化しようとも、資本そのものには何等の變化をも與へないものである。但しすべての資本は、一定量の商品、即ち交換価値ではあり得るけれども、一定量の商品、即ち交換価値のすべてが資本であるといふことは出來ないのである。

さて、交換価値は如何なる分量であらうともそれはあくまで交換価値である。即ち、十萬圓の家屋は十萬圓の交換価値であり、一本七厘のバツトは七厘の交換価値を包含してゐるものである。他の貨物と交換することの出來るものはすべて皆商品であつて、その他物と交換される割合が即ちその生産物（商品）の交換価値なのである。そしてその交換価値を貨幣に依つて現はしたものが取りも直さず価格を意味してゐるのである。従つて生産物の數量は、その商品たる性質——交換価値たる性質——価格を有つものとしての性質に何等の影響をも及ぼさない。例へば

鐵を他の生産物と交換せんとする時、それが一斤であらうと一萬斤であらうと、鐵の商品たる性質——交換価値たる性質には何等の變化をも生じないのである。たゞその數量によつて價值に大小があり、價格の上に高低が存在するだけのことに外ならない。

然らばある分量の商品、或る分量の交換価値が如何にして資本たり得るのか？——それは商品が獨立の社會力として働き、そして現在の生きた勞働力と交換して自己を維持し且つ増殖することに依つてである。即ち、勞働者が原料や機械や生活資料の力に使用せられて、更にそれらの商品を製造し増殖するために働かせられるとき、その時初めてそれらの商品は資本となり得るのである。従つて勞働能力より外に何物をも所有しない階級、即ちプロレタリア被支配階級の存在が資本に取つては必須な豫備條件なのである。

過去の勞働、蓄積された勞働、物體化された勞働が現在の生きた勞働の上に支配力を持つといふことが、即ち「蓄積された勞働」に資本としての性質を附與するところのものなのである。資本とは、蓄積された勞働が生きた勞働のために新しい生産の手段になるといふことではなくして、生きた價働が蓄積された勞働のために、その交換価値を維持し且つ増殖するための手段にな

賃銀労働とは如何なるものか
るといふことに外ならないのである。

三四 賃銀労働とは如何なるものか

ところで、以上の如き資本を所有してゐるところの所謂資本家なるものと、賃銀労働者との間の交換は果して如何にして行はれてゐるであらうか？

吾々賃働者は自分の労働力と交換して生活資料を資本家から受取つてゐる。然るに彼等資本家は自分の生活資料と交換して吾々の労働を受取つてゐる。即ち、労働者の生産的活動を受取つてゐるのである。労働者が自分の消費したものを復舊するばかりでなく、更に「蓄積された労働」——即ち資本のために、それが以前持つてゐたよりもヨリ大なる価値を與へるところの労働者の創造的労働力を受取るのである。吾々労働者が資本家から受取るものは、現存してゐるところの生活資料の一部であつて、それが何のために役立つかといへば直接の消費である。一體吾々人間が生活資料を消費する場合、その生活資料に依つて生命の支へられる期間を新しい生活資料の生産のために、即ち消費せられた価値の代りに労働を以つて新価値を創り出すために使用しないな

らば、その消費せられたところの生活資料は永久に失はれてしまふであらう。けれども労働者はその大切な力を生活資料と交換して資本家に引渡すのである。従つて労働者に取つては、如上の新価値を創り出すための力は全く失はれ盡すものである。

例を擧げてこの間の消息を説明してみらば、或る日傭取が一日二圓で農家に雇はれ、終日働いて四圓の収入を擧げるとする。農家の主人は日傭取に與へたところの価値を回収するだけではなく、それを二倍にしてゐるのである。——即ち、彼は日傭取に與へた二圓を生産的、増殖的に消費したのである。彼は日傭取の労働力を二圓で買ったのであつたけれども、その労働力は二倍の価値ある作物を創り出すので結局彼は二圓で四圓の価値を創り出したこととなるのである。これに反して日傭取の方は、自分の生産力を主人に引渡してその代りに二圓の賃銀を受取つたのであるが、その二圓は生活資料と交換されて早やかれ遅かれ消費されるのである。故にこの場合二圓の金は二重の意味に於いて消費されてゐるのである。資本家としては再生産的に、労働者としては不生産的に消費されてゐるのである。故に資本なるものは必ず賃銀労働を前提とし、又賃銀労働なるものは必ず資本を前提としてゐるのである。即ち兩者は相互に條件づけられ、而して

賃銀労働とは如何なるものか

兩者は相俟つて發生するところの性質を持つてゐるものなのである。

又木綿工場の労働者は木綿品ばかりを生産してゐるのであらうか？ といふに決してさうではない。彼は亦資本をも生産してゐるのである。彼は價值を生産するのだ。そしてその價值が更に彼を支配し、又その支配に依つて更に新しい價值を作り出すことになるのである。

さて、資本が増殖するためには先づ必ず労働力と交換されて、賃銀労働の活動を起さなければならぬ。而して又賃銀労働者の労働力が資本と交換される時には、必ず資本を増殖して労働者を奴隷とするその力を強めることとなるのである。故に現代社會機構の下に於いては資本の増加は必然的にプロレタリアートの増加を約束するものである。

こゝに於いて資本家及びブルジョア經濟學者達は主張していふのだ。——「資本の利益と労働の利益とは同一である。」と。如何にも彼等のいふ通りである！ 資本が労働者を使はなかつたならば吾々労働者は死ぬるであらう。又資本が労働力を搾取しなかつたならば、資本は死ぬるであらう。そして資本は労働を搾取するためにそれを買はずにはゐられないのだ！ かくて生産資本が増大すればするほど、それだけ産業は繁昌しそれだけブルジョアジーは富裕となり、それだけ世

間は好景氣となつて資本家は甚だ多くの労働者を必要とする結果、労働者は可なりに高い賃銀を以つて雇ひ入れられることとなるのである。故に生産資本が成るべく速かに増大することは、即ち労働者が幾分高い程度の生活を營むための欠くべからざる條件なのである。

しかし、翻つてその考察を一步進めて見るとき、生産資本の増大とは一體如何なることを意味し約束してゐるであらうか？ といふことについて考へ直して見なければならぬ。生産資本の増大とは即ち、生きた労働に對する蓄積された労働——即ち資本の力の増大に外ならない。労働階級に對するブルジョアジーの支配力の増大を意味し約束してゐるのだ。賃銀労働が自分を支配するところの富、自分に敵對するところの力、即ち資本を産出するとき、労働者雇入れの資料（生活の資料）は再び労働者の手に戻つて來るけれども、その結果としては必ずその労働が重ねて資本の一部分となり、更に資本の増大を促進するところの槓杆となるものである。

彼等資本家乃至その御用學者達が前記の如く「資本家の利益と労働者の利益とは一致する」といふのは、たゞ右の如き意味に於いてとしかないので。即ち、資本と賃銀労働とは一個の事實關係（一つの事柄）の両面だといふことである。それは丁度高利貸と道樂者とが相俟つて生存す

るといふことに等しいものであつて、一方が常に他の一方の條件となつてゐるものである。ところが、賃銀労働者が賃銀労働者である間は如何にしても彼の運動は資本といふ巨大な魔の手に吊り下げられてゐるのである。労働者と資本家との間に利害の一致があるといはれるところのものは、即ち右の如きものに過ぎないのである。

三五 資本の増大とその影響

現存の資本主義社會制の下に於いては資本が増大すればその結果として賃銀労働の分量が増大し、従つて賃銀労働者の數が増大して來るものである。それは即ち資本の支配がいよ／＼多數人の頭上に及ぶことを意味してゐるに外ならない。そこで最も好都合な場合を想像するとしても、生産資本が増大すれば労働に對する需要が増大し従つて賃銀（即ち労働力の價格）が増大するといふことだけにしかすぎないのである。

——例へばこゝに一つの小さな家があるとしてその周圍の家々が同じやうに小さい間は、住宅としては誰しも別に不足を感じるものはないであらう。けれどもその小さい家の隣に一つの宮殿

の如き大邸宅が打ち建てられたと假定するならば、その小さい從來からの家は如何にも見窄らしい假小屋のやうに感じられ出すであらう。そしてその家の居住者に社會的地位のないことが感じられるであらう。たとひ文明の進歩につれてその家がだん／＼高く築き上げられたとしても、隣の宮殿の如き大邸宅がそれと同じやうに、否むしろそれより以上に大きくなつて行くならば、小さい方の家の居住者は次第々々に不平不満の度を増さずにはゐられないであらう。

さて、賃銀がかなりの騰貴を示すのは必ず生産資本の急激な増大を前提としてゐるのである。ところが、生産資本の急激な増大は必ず亦急激な富の増大、奢侈の増大、社會的欲望の増大、社會的享樂の増大を伴はないではゐないものである。そこで労働者の快樂は何程かの増大を來たさうとも、資本家階級の大快樂、及び一般社會の發達の度と比べるならば、労働者の感ずる社會的満足はむしろ減少して來るのである。吾々人間の欲望なり快樂なりは、その起源を社會に發してゐるものである。従つて吾々は欲望に満足を與へる外物そのものに依つて快樂を評價しないで、社會的な標準に依つてそれを評價するのである。欲望なり快樂なりは社會的な性質を持つてゐるものであるのだから、自然そこには比較的な性質を持たずにはゐられないものなのである。——例

へば炎天の氷水一杯が如何に渴きを癒す實効を持つてゐようとも、現在の社會文化の下に於いては當り前のことゝ人々は考へてゐるであらう。社會的な標準から評價するならば、氷水一杯位は何んでもないのだ。何故ならば、箱根の風光明眉な綠蔭の間に建てられた別荘に避暑してゐるものに比べたならば、吾々に取つての氷水一杯は快樂などゝいはるべきほどのものではないからである。

そこで貨銀は決してそれと交換し得られるところの、商品の分量のみでは決定されるものではないのである。それにはいろ／＼な要素が加はつて来るのである。吾々労働者が自分の労働力に對して直接に受取るものは何程かの貨幣であるが、それでは貨銀がその貨幣價格だけで決定されるかといふとこれ亦必ずしもさうではないのである。

アメリカに於いて豊富な鑛山の發見されたのは十六世紀のころであつたが、その鑛山の發見せられた結果ヨーロッパ方面に於いての金銀の數が増加したのであつた。従つてその價值は他の商品との比較上下落したのである。けれども労働者は以前と同額の貨銀——即ち貨幣を得てゐたのである。そこで彼等の労働力の貨幣價格は以前と同様ではあるけれども、その貨幣と交換するこ

との出来る商品が以前（金銀の増加しない前）に比べて少額になつてゐるので、實際に於いて貨銀は下落したと同様の結果を來たしたのであつた。そしてこのことはその後にはける資本の増殖、ブルジョアジの勃興を助長する一原因となつたのである。

右の事理を詳細にするため今一つ他の場合を考へて見ることにしよう。——それは一八四七年の冬に於ける世界的凶作の結果として、穀類、肉類、バターなどの價格が著しく騰貴したのであつた。この場合労働者が以前と、即ち前記食料品その他のものが騰貴しない前と同じ貨銀しか得てゐなかつたとすれば、その結果は前同様やはり貨銀の下落したのと何等の相異もないのである。労働者達は以前と同じ額の貨幣で以つて以前より少ない生活資料をしか買ふことが出来ないのである。

今度は又労働者の貨銀はもとのまゝであるのに對して、新しい機械の應用や或は豊作その他の結果として、すべての農作物や工業品の價格が下落したと假定して考へて見よう。この場合に於いては、労働者は以前と同じ金額で以前よりも多くの生活資料（商品）を買取ることが出来るのであるから、その實際上に於いては貨銀が如何ほどか上げられたと同じ結果となるわけである。

——そこで労働力の貨幣価格——即ち名目上の賃銀は必ずしも實質上の賃銀と一致するものではないといふことが認められるであらう。故に吾々が賃銀の騰落を論ずる場合に於いては、常に名目上の賃銀と實質上の賃銀とを併せて考慮しなければならぬのである。しかし名目上の賃銀（即ち労働者が資本家から受取るところの貨幣額）と實質上の賃銀（即ち労働者がその貨幣で買ひ得るところの商品の分量）とのことを考へたゞけでは、決して労働賃銀の意義に關するすべてのことが盡される譯ではないのである。

賃銀は又特に資本家それ自身の利潤との關係に依つても決定されるものである。これを稱して比較賃銀、或は相對賃銀といつてゐるのである。前記の實質賃銀は、労働力の價格を他の商品の價格との關係上から表示したものであるが、これに反して相對賃銀の方は、今創造された新價值に對する生きた労働の分け前を蓄積された労働（即ち資本）の分け前との關係上から表示したものである。更に換言していふなら、相對賃銀なるものは労働者の賃銀を資本の利潤に比較して考へた場合のことなのである。

三六 労働賃銀と利潤の關係

前章に於いて既に論述した如く、労働賃銀なるものは労働者が自分の生産する商品に對して受けるところの分け前では決してないのである。それはたゞ資本家が労働力買入れのために、兼ねて用意してゐたところの貨幣の一部を支拂はれるものに過ぎないのである。けれども資本家は吾々労働者の生産した商品を賣つて、その價格の中から前に吾々に支拂つたところの賃銀を取戻さなければならぬ。尙ほそれを回収するについては彼が支拂つた生産費以上にある剩餘——即ち利潤を生ずるやうに考慮するのが彼等の間に於いての原則であるのだ。彼等資本家に取つては、吾々労働者が生産したところの商品の賣上げ價格は、それを三つの部分に分つことが出来るのである。即ち第一には前拂ひされた原料の價格の回収、及び機械、道具その他の労働要具に對する消耗額の回収であり、第二には前記の前拂ひされた労働賃銀の回収である。而して第三には右第一第二の價格を差引いた以上の剩餘、即利潤なのである。右の中第一の部分は以前から存在してゐたところの價值を回収することであるけれども、第二の賃銀の回収と第三の剩餘利潤との二つ

のものは、明かに全く吾々労働者の労働に依つて作り出されたところの、さうして原料の上に加へられたところの新價值から生み出されるものである。そこでこの意味に於いて吾々は賃銀と利潤とを、労働者の生産物に對する分け前と見て相互に比較させることが出来るのである。

さて、實質上に於いての賃銀は何等以前と變化がなく、或はむしろ騰貴してゐるやうな場合にあつても、それでも尙ほ相對的な賃銀に於いては下落してゐるやうな場合がある。例へば、すべての生活資料の價格が三分の二の下落をしてゐるのに對して、賃銀は三分の一しか下落しない——即ち三圓から二圓に下落したやうな場合、労働者はその二圓で以前の三圓の時よりも多くの商品を買ひ得るであらうけれども、それでもその賃銀を資本家の利潤と比べて見たならば却つて減少したことになるのである。資本家——例へば製造業者の利潤は一圓だけ増加したのであるけれども、それは即ち彼が労働者に拂ふ交換價値は減少してゐるのに、労働者は以前よりも多量の交換價値を生産しなければならぬといふことに歸着するのである。資本の分け前は労働の分け前に比べて増加した譯である。資本と労働との間に於ける富の分配が一層不平等になつたといふことを意味してゐるにすぎないのだ。資本家達は同額の資本を以つて一層多量の労働を支

配し得るやうになつたのである。それは資本家階級の吾々労働者階級に對する支配的權力が増加し、労働者の社會的地位が層一層下落したといふことに外ならないのである。

然らば賃銀と利潤との相關的の騰落を決定するところの法則は何であるか？——といふことを考へてみるに、先づ第一にこの二つのものは正しく互ひに逆比例を爲してゐるものである。資本の分け前（即ち利潤）は労働の分け前（即ち労働賃銀）の下落に伴ひ、それと同じ比例で騰貴して行くものである。そして又これが逆の場合はやはり逆である。換言すれば、利潤は賃銀の下落する程度だけ騰貴し、そしてその騰貴する程度だけ下落するものであるといふことである。以上の論に對して、或は次のやうな議論が提出されるかも知れない。——「資本家は他の資本家との間に於いて自分の生産物の有利であるやうな交換をして、それに依つて利潤を得ることが出来るのだ。或は新市場を開拓したとか、或は舊市場で一時的に需要が増加したとかいふやうな結果として、とに角自分の商品に對する需要の増加に依つて利潤を擧げることが許されてゐるのである。だから資本家の利潤は、賃銀の騰落——即ち労働力の交換價値の上下には何等の関係もなく、他の資本家の利益を掠めることに依つて増加され得るものではないか。尙ほ又吾々資本家の

利益は、労働要具の改善、自然力の應用などに依つても増加することの可能なものではないか。」と。

しかしこの場合先づ第一に考へなければならぬことは、賃銀と利潤との騰貴する順序が逆様になつたところで、その結果に於いては何等の變化も起り得ないといふことである。前記の如き資本家乃至彼等の御用學者のいつてゐるやうな場合には、如何にも賃銀が下落したために利潤が騰貴したのではあるまい。けれども利潤が騰貴したから賃銀がその割合上に於いて下落したのではないか！ 畢竟彼等資本家達は、同じ分量の他人の労働に依つて以前よりも多量の交換價值を買取るのであるが、然し労働に對してはそれがための増拂ひを決してしようとはしないといふことである。故に労働は資本家階級の取得する利潤に比べてみると、以前よりも少ない支拂ひを受けることとなるのである。

次に考へなければならぬことは、前にも記した通り諸商品の價格に變動があるにも拘はらず、各商品の平均價格——即ち他の諸商と交換される割合は常に生産費に依つて決定されるものであるといふことである。故に彼等の論じてゐるやうな資本家同志の間に於いての掠め合は、必

然的に平均しないではゐないものなのだ。——（考へても見るが、資本家階級全體が掠め合に依つて利潤を高め得る筈がないではないか）又労働要具の改善や自然力の新應用とかいふやうなものは、以前と同一分量の労働と資本とを以つて、以前よりも多量の商品を一（一定の労働時間に）生産させらることは可能であらうが、さうした商品の増加は決して交換價值の増加ではあり得ないのである。——例へば紡績機械の發明に依つて以前よりも二倍だけ多くの糸が生産されると假定して考へてみよう。即ち以前は五十貫しか生産されなかつたものが今は優に百貫の糸が生産されるとする。この場合、その百貫の糸と交換されるところの他の商品の額は、（少し永い期間についていへば）以前の五十貫の時に交換されたものより多くは決してならないのだ。何故ならば、糸の生産費が半減してゐるのであるから——即ち同じ費用で二倍の糸が生産されることになつたのであるから糸の價格は自然半分に下落するのである。従つて商品の分量の増加といふことは決して交換價值の増加といふことを約束しはしないのである。

それがたとへ一國に於いてであらうと或は全世界を通じてであらうとも、彼等資本家階級が生産の純益を如何なる割合で彼等自身の間で分配しようとも、いつでもその純益の總額は蓄積労働

——即ち資本の全體が直接労働によつて増加されただけの額を超えることは出来ないものである。故にこの純益の總額は労働が資本を増加させる割合、即ち利潤が賃銀に比べて騰貴する割合と同じ割合を以つて、増加するものであることを記憶しておかなければならない。

三七 利害相反する二つのもの

以上論じ來つたところに依つて、吾々は資本と賃銀労働との利害が全く正反對のものであることを知つた。——即ち、資本の急激なる増加は取りも直さず資本家利潤の急激なる増加に外ならないのであり、利潤が急激に増加し得るのは畢竟労働の價格（即ち相對的の賃銀）が同じく急激に下落した場合に限られてゐるといふことである。そして前にもいつた通りたとひ實質的賃銀が名目的賃銀（即ち労働の貨幣價值）と同時に騰貴しても、その實質賃銀が利潤と同じ比例で騰貴しなかつたならば、相對的賃銀はやはり下落してゐるのである。例へば好景氣時代に於いて利潤は三割も騰貴してゐるのに對して、労働賃銀は五分だけしか騰貴してゐなかつたならば、相對的賃銀は増加したのではなくしてやはり減少したと同様、否現實に於いて減少したことなのである。

故に資本の急激なる増加と共に労働者の収入が増加しても、それと同時に労働者と資本家とを分つところの社會的な暗渠あんきよはますます擴大されるだけに過ぎないのだ。即ち労働に對する資本の支配權力が増大し、そして資本に對する労働の隸屬れいぞくがいよ／＼甚だしくなるだけにしか過ぎないのである。

ところで、資本の急激なる増加が吾々労働者の利益をもたらずといふが如き議論は、實はたゞ次のやうな意味に於いてゞしか首肯しゆこんし得られないものである。即ち、労働者が急激に資本家の富を増加させれば増加させる程、吾々労働者に落ちて來るパン屑ぱんくせつのこほれが増加し、從つて使役される（支配される）労働者の數が増加するといふ甚だ屈辱くつじやく的な意味に於いてのみ。

かくて労働者階級に取つて最も好都合である状態、即ち資本が最も急激に増加した場合にあつても、（たとひ労働者の實生活が可なり多くそのために改善されようとも）尙ほ且つ労働者の利益と資本家の利益との反目は決して／＼除去ていきよされ得るものではないのである。利潤と賃銀とは、以前の通り矢張り頑として逆比例を爲してゐるものである。成る程、資本が急激に増大したならば賃銀も亦幾分騰貴することは事實であらう。けれども資本の利潤はそれと比較にならないほどの

速力を以つて騰貴して行くのである。そして労働者の實生活は以前に比べて幾分は改善されるであらうけれども、その社會的地位は以前に比べて一層隷屬的な低下を來すものである。それは取りも直さず労働者と資本家との間に横はつてゐる虚隙をますますいよく擴大し深刻化するものに外ならないのだ。

尙ほ今一つ資本の増大と労働賃銀との關係について附記しておかなければならないことは、生産資本の最も急速なる増加が賃銀労働に取つて最も好都合な状態だといひ得るのは、實にたゞ次の如き意味に於てとしかなくといふことである。——即ち、労働階級が自分に敵對する權力自分を支配するところの他人の富を急速に増大させれば増大させるほど、彼等が更に新しく資本家の富を蓄積するために労働を要求され、更に資本の權力を増大するために労働させられ、そして自ら甘んじて資本家が労働者を引きずるための金の鎖を鑄造させられるのに、甚だ好都合な状態を生ずるといふことである。

一體、生産資本の増加と賃銀の騰貴とはブルジョア經濟學者達の論じてゐるやうに、本當に不可分なものであるだらうか？といふことを吾々は今更らながら考へてみずにはゐられない。マル

クスはそれに答へて次のやうにいつてゐる。

——「吾々それを言葉通りに信じてはならない。若し彼等が露骨な言葉で資本が増大すれば増大するほど、その奴隷も樂が出来るのだとしても、吾々はそれを輕々しく信じてはならない。昔の大名などは金ピカの家來共を引連れたりすることを誇りとしてゐたものだが、今のブルジョアジーはそんな馬鹿げた眞似をするのには、餘りに醒めてをり餘りに善く計算を知つてゐるのだ。ブルジョアジーはその生存の必要上、嚴密な計算をせずにはゐられないのである。

故に吾々は次の問題をもつと詳細に考究し検討して見る必要がある。——即ち、生産資本の増加は労働賃銀に對して如何に影響するか？といふことを。

それはブルジョア社會の生産資本が全體に於いて増加したならば、労働の多方面な集積が起る。資本家はその數と大いさを増し、従つて資本家間の競争が増す。資本家が益々大きくなれば、産業界の戰場に於いて益々巨大な武器を以つて、益々有力な労働軍を率ゐることが可能となる。」

マルクスはつゞけていふ、

利害相反する二つのもの

——「一の資本家が他の資本家を戰場から驅逐するのは、只安賣をするに在る。安く賣るためには安く生産しなければならぬ。即ち労働の生産力を出来るだけ高めなければならぬ。然るに労働の生産力は主として分業の進歩と、機械の使用される規模が大なれば大なるだけそれに應じて生産費が益々減少し、労働が益々多産的になる。そこで資本家の間に於いて盛んに分業と機械とを増加し、それを出来るだけ大規模に搾取しようとする競争が各方面に起る。そこで若し一の資本家が分業の増進に依り、新機械の使用及び改善に依り、又一層有利な一層規模な自然力の搾取に依り、同じ分量の労働を以つて他の競争資本家に比べて、一層多量な商品を生産する方法を發見して——例へば他の資本家が半反の布を作る間に一反の布を作り得るとしたなら、この資本家は一體どんなことをやりだすであらうか？」

マルクスが右の紡績資本家についての例から吾々に語るところは、大體次のやうな内容と結論を教へてゐるのである。——即ち、その資本家（他の資本家が半反の布を生産する間に一反の布を生産し得るところの資本家）はその布を元の價格で賣り出すことが出来るであらう。けれどもそれでは敵を驅逐して自分の販路を擴張することが出来ない。今や彼は擴大せられたところの生

産力に依つて、自分の商品をより安く賣り出すことが可能になると同時に、より多く賣り捌かなければならないであらう。即ちより大なる販路を獲得しなければならぬのである。そこで彼はその布を他の競争者のものよりも安く賣り出すことであらう。けれども彼は又競争者の半反の價格で自分の一反を賣り出しはしないのである。尤も生産費から計算すればそれでも尙ほ引合ふ譯であるが、それでは餘分の利得が（以前儲けてゐたよりも以上の）ない。それに彼はほんの少しでも安く賣り出しさへすればそれで敵を驅逐し、少なくともその市場の一部分を掠奪することが出来るのである。

けれども、この資本家の特權は決して永續するものではないのである。何故ならば、他の競争資本家も亦同じ機械と同じ分業とを、同じ（若しくはより以上の）大規模を以つて採用するであらうからだ。そして遂にはそれが一般に行はれる結果は、明かに布の價格は又元の生産費以下に下落するばかりではなく、尙ほ現在の生産費以下にまで下落するであらうから。

こゝに於いて各資本家達は、お互の關係上からすればその新しい生産手段の採用以前と全く同じ状態の下におかれることとなるのである。かくして又競争が新しく開始され行く。それは一層